# 小型土製馬形年代考

大 平 茂

## 1. はじめに

小型土製馬形とは、これまで土馬または陶馬と呼ばれてきた古墳時代から奈良・平安時代の馬の形 を模した小さな土製品を指している。

土馬の型式分類と編年の研究は、1975年までに発表された大場磐雄・前田豊邦・泉森皎・小笠原好彦等の論考により進められ、ほぼ完成したかに見えた。しかし、その後行政発掘調査の増加に伴い全国の官衙関係の遺跡、須恵器の窯跡、さらに古墳時代の集落跡からの発見例が増えてくると、律令期における地方の出土品がこうした分類に整合しないこと、そして古墳時代の土馬が従来の分類のみでは不十分だということも明らかになってきたのである。

そこで、本稿では小型土製馬形の新たな分類を試み、編年の検討を行ってみようと思う。まず、研究史において先学の型式分類を紹介し、それぞれの評価批判を通じて、最も形質的特徴を抽出した分類を創出したい。次いで、分類型式の中に当てはまる出土状況の明らかなものを、伴出遺物から年代を決めて、編年を行うものである。なお、土製馬形にはその代表格として古墳時代の馬形埴輪が存在している。私見では土馬や陶馬もこれからの連続もしくは派生を考えているが、今回は対象から除外するため土製馬形に小型を附した。

## 2. 型式分類の研究史

小型土製馬形への興味や関心は、古く江戸時代に遡る。以下、明治・大正時代までを前史として扱い、昭和時代以降の研究をⅠ期からⅣ期に分けて記述する(なお、引用文は当時の文体のままとした)。

## <前史>

小型土製馬形を初めて記録したのは藤貞幹の『集古図』(1789年)であり、ここでは瓦馬・瓦犬の 名称で呼ばれていた。その後、滝沢馬琴をはじめとする好事家達の集会記録『耽奇漫録』(1825年)

にも登場し、金森得水の『本朝陶器攷證』や大和普賢 院の『珍蔵玉石図』にも紹介がある。

次いで、明治時代に入ると、松浦武四郎の『撥雲餘 興』第二集〔松浦 1882〕に土馬の名称で、大和出土の 五体が図示(第1図)されている。

江戸・明治時代の時期は、埴輪馬を含めて古代土馬・ 古瓦馬等と呼ばれていた。珍品としての遺物の扱いで はあるが、これらについて寸法を測り作図する等、丁 寧な記録を残したことは相応の評価をすべきであろう。

そして、大正時代になって山中笑が「繪馬と土馬の 關係」〔山中1915〕を発表する。山中は「此等は埴輪 馬と繪馬額との間過渡期のものとも見るべきなり」と



第1図 土馬集成図(松浦1882より)

埴輪馬から土馬、そして絵馬へと変遷する可能性を示唆した。埴輪馬から絵馬への連続性は明らかでないものの、おおよそ土馬の年代は古墳時代後期から平安時代であり、それぞれの存続時期が重なることは間違いのない事実である。

また、この頃から『考古學雜誌』や『歴史と地理』等の学会誌に、小川榮一〔小川1914〕・中山平次郎〔1914〕・梅原末治〔1914〕等小型土製馬形の資料紹介が始まっている。しかし、資料点数の少なさもあり、当然のことながら分類・編年の研究には至っていない。なお、梅原報告の「河内国營田村発見の土馬(古市遺跡・東京国立博物館蔵)」は馬具等の装飾から、土馬の最古段階に位置づけられる重要なものである。

#### <第Ⅰ期>

昭和時代に入ると、大場磐雄が「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」〔大場 1930〕を発表し、"祭祀遺物" の概念を確定すると共に、土馬・子持勾玉等の類をこれに含めた。また、後藤守一は『考古学講座』〔後藤 1930〕に「後世神社に神馬を奉納するとか、絵馬を掲げるといふ風習などに関係あるものとすべきであろう」と、その性格について山中と同様の見解を採った。

次いで、大場は「上代馬形遺物に就いて」〔大場 1937〕に当時知られる約 50 箇所の資料を収集し、 土馬に関する本格的な論考を公表したのである。

馬形遺物には土製・石製・木製等が存在する。「しかし質料から直ちに該品の内容に影響する根本的な要素を發見することは困難である。(中略)次に必ず考慮に上るものはこの形態上の分類である。第一に明かに馬と見られるものと、馬か否か不明であるが一種の獣類と見られるものとの二者である。」とその形態から二つに分類を行った。なお、後者の一部は後に小林行雄が「土製支脚」と認定している。

次に「確實に馬を模したもの、の中にも二型式が存する。それは馬具を着装した餝馬と、然らざる 裸馬とである。然しこの區別は製作上の精粗に基づくもので、精巧に作られたものは何れも餝馬であ り、粗造品は簡略としたので裸馬となつたとも見ることが出來よう。」と馬具の有無に着目し、飾馬 と裸馬の二つの形式に分ける分類を試みた。さらに、これを精から粗への変遷と捉えたのである。最 初の土馬分類というだけでなく、精から粗への把握は実に高く評価できるものであった。

また、年代観については「原史時代以降であることは言ふ迄もなく、更に或ものは歴史時代に入つ て居ようと思考する。」と大局ながら適正な判断であった。さらに、土馬を以って絵馬の起源と説か れる点について、土馬と絵馬は併行的に存在し発達したと述べている。

この後、日本国は第二次世界大戦に突入し、考古学をはじめ学問ができる環境ではなくなった不幸な時期である。こうした状況の中、大場磐雄の『神道考古學論攷』〔大場 1943〕と清野謙次の『日本人種論変遷史』〔清野 1944〕の刊行は評価されるものであった。特に、小型土製馬形について大場は前記論文を再録し、清野は江戸時代から昭和初期までの研究を学史として概観したのである。

以上、昭和時代の戦前までが分類研究史の第 I 期(黎明期)と捉えられ、祭祀遺跡とその出土遺物の研究を進め、これを神道考古学として体系化した大場磐雄によって、飾馬と裸馬に分ける最初の分類が行われたのである。

#### <第Ⅱ期>

戦後の小型土製馬形研究は、昭和30年代に入る土井實の「大和土製馬考」〔土井1955〕まで注目されるものが認められない。考古学の他分野(古墳出土の鏡等)と比較すれば、寂しい限りである。

土井は大和地方出土の土馬を集成すると共に、その表現方法から下記の三種類に分類した。

- 第一類 「(前略) 比較的小形のもの多く騎坐も明らかに表われず、わずかに扁平の部分を作る程度の ものである。顔は三ケ月形に土をかためてつけたものや、頬かむり式に薄く伸ばした粘土を 顔にまきつけたもので、(中略) この種の土馬は土も精選されず小石混りで焼成度の高くな いものが多い。|
- 第二類 「(前略) 鞍の兩橋部を背上に突起せしめ騎坐の部分を凹めたものがあつて, 頭部の手法も精 巧で兩眼・鼻孔・口を表示しタテガミの部分を意識的に表現したものが多く見出される。此 種土馬は全姿も比較的生馬によく似て作られている。(後略)」
- 第三類 「土質も精選され焼成は比較的堅緻でその中には須惠質を思わせるものがある。姿態も大きく頭部にはいわゆる頬かむり式顔部を卷きつけずに,直接頸部より作り出されたものがある。 (中略) 例えば奈良公園出土のもの,大安寺出土のもの,奈良高校出土のものがこれに属する。」

この分類は顔部の形態、そして騎坐の有無等で捉える試みであり、裸馬に近い素朴な形式の大和出土土馬の特徴を非常によく理解したものである。ただし、「こうした類別は、粗より精への發展的過程として勿論そこに時代差というものが考えられるが、むしろ大きい要素は製作者の問題ではないか」と、この違いを年代的な差より工人の差と考えたため、発達段階を大場とは逆に粗より精へと把握し、実際問題としては時間軸に沿った整理配列(第三類→第二類→第一類)とならなかった点が惜しまれる。

年代については、他地域と同様に考えて奈良時代前後より平安時代頃に置いている。現在の都城型 (大場の橿原式、金子の大和型) の土馬に関する限り妥当なものであった。なお、古墳出土のものを検 討することにより、古墳時代にまで遡る可能性を指摘し、埴輪馬に近い形態の飾馬に注目したのは、小型土製馬形の発生を考える上で重要な視点であった。

また、1958年原田大六は『沖ノ島』 [原田 1958] の調査報告書に、同遺跡出土の滑石製馬形を小型品で粗末な点が土製馬形と一致すると指摘した。滑石製馬形は土製馬形に見られる四肢の表現がないこと、偏平な石板を加工して側面観のみで表現することが特徴で、後年発見される木製馬形と同様の形態をとるが、ここでも飾馬と裸馬の二類に分ける考え方を示した。そして、各々を四形式に細分し、写実的なものから抽象化したものに変遷すると捉えたのである。なお、年代は古墳時代後期に属する八号遺跡より新しい時代のものと考え、奈良時代以降に下る土馬と同様に扱った。

1964年、鹿児島県伊佐郡菱刈町の岡野遺跡において、土製人形と小型土製裸馬が組み合わさる形で発見された。火葬墓に伴うもので、奈良時代頃とされる。同町内では、以前にも同様の遺物が発見されており、土馬の使用方法として注目すべき地域である〔新東 1978〕。

さて、昭和40年代に入ると大場磐雄が「上代馬形遺物再考」〔大場1966〕に、この時点で約130箇 所に増加した資料をあらためて集成し直すと共に、再度分類と出土遺跡の検討を行い、馬形祭祀につ いて考察を進めている。

最初に「作られた物質から土製・石製・鉄製・板製の四種に分けたい」と、まず材質から土製・石製・鉄製・板(木)製に分類した。多方面の祭祀遺物に精通した大場ならではの考え方であるが、土製品は立体的であり、木・石製品は側面形を平面的に模したという形態の違いがある。さらに「土製品の中には、その焼成によって狭義の土製と陶製の二種に分けられる。(中略)しかし製作の精粗が必ずしも土製と陶製の区別とも一致していない。そこで私は一括して土馬としておいた。」とする。土師質と須恵質に分類は可能であるが、形態上に確かな相違はないという重要な指摘である。なお、平城京出土の土馬に須恵質のものがないということは、祭祀内容によって使い分けをしている可能性もあ

1 土製	A飾馬	a 皆具式	2石製	A飾馬	3鉄製	A飾馬	4板製	A飾馬
		b簡略式						
	B裸馬	a 橿原式		B裸馬		B裸馬		B裸馬
		b土獣式						

第1表 大場分類

り、分類とは別に区別が必要であろうと考える。

次に、「大別して『飾馬』と『裸馬』の二形式に分けられる」と、大きく形状から飾馬と裸馬に二分類した。さらに、「飾馬とは鞍・鐙や面繋・尻繋および手綱等を着装した状態を示したもので、子細に見ればその中にも精粗があって、鞍のみ示したものや、手綱ばかりしか認められぬものもあるが、(後略)」と、飾馬を皆具式と簡略式の二つの形式に細分する。「次に裸馬式を見る。これにも二形式があって、一は馬よりも犬に近い表現で、顔が三か月状となり、四脚は無造作に張り、尾も同様、一見古拙で愛すべき形状を示すもの、(中略) 私はこれが大和橿原辺に最も多いので、『橿原式』と仮称している。(中略) その二は、各地から発見される土製獣形品で、明らかに馬と確認できるものもあるが、四足獣であることは明らかであるが、はたして馬か否か判定に苦しむものもある。」と、裸馬も橿原式と土獣式の二形式に分けたのである(第1表)。

分類基準は、前稿と同じ飾馬と裸馬の二形式を基本に、土馬をそれぞれ細分している。飾馬については、要点を押さえたものと評価出来るが、裸馬は一地域の特定時期のもの(律令期の畿内)と獣形品だけを取り上げた為、土井分類と同じく時間軸と空間軸に沿った整理配列とはなっていないのである。

また、「私の先の論考では、本来が飾馬であり、裸馬は簡略化されたものであると述べているが、はたしてそうであろうか、(中略)結局は祭儀の内容により、または神の嘉納の種類によって、必ずしも一定していなかったとすべきではあるまいか。」と飾馬と裸馬の二形式が存在する点について、これまでの飾馬から裸馬への変遷とする時間差でなく祭祀の内容により異なったと見る見解に変化した。現時点では、小型土製馬形も初源期の段階からこの二種が確認できるのである。理に適った解釈であり、筆者も分類に当たっては飾馬と裸馬に分け、それぞれについての変遷(写実から簡略へ)を考えることにしたい。なお、気に掛かるのは都城型の鞍馬が徐々に裸馬へと変化すること、そして木製馬形の場合は逆の裸馬から飾馬に変遷した可能性が高いことである(木製も同時存在であればよかったのであるが、現時点では裸馬が古式となる)。

年代については、総体として「馬形遺物の盛行した年代は古墳時代末期から平安時代ごろまでとなる」と位置づけ、それぞれ土馬は奈良時代前期頃から、滑石製品は福岡県沖ノ島遺跡を古墳時代末にそして埼玉県西別府遺跡のものを奈良時代、鉄馬を奈良から平安時代とした。なお、土馬を古墳時代にまで遡らせなかったのは、古墳出土とされたものの大半が奈良時代以降の形態のものであり、確実に古墳の主体部等副葬品としての明らかな例がなく、これらを後世の墓前祭と捉えたのである。古墳出土品をむやみに同時代のものと考えない、優れた眼力でもあった。

次いで1968年、前田豊邦が「土製馬に関する試論」〔前田1968〕として、大場と同様に須恵質・土 師質の区別をしないで、以下の形態と写実性に着目する四分類案(第2表)を提示した。

A類 「馬具として、面繋、胸繋、尻繋、轡、手綱、鞍、鐙などが粘土の紐や板を貼付手法によって 着装されるもの」

A類	A 1 類 兵庫・森尾 (旧神美村) 例	B類	B1類 香川・上高瀬例
	A 2類 静岡・大沢窯例		B 2類
C類	C1類 奈良・富雄例	D類	D1類 京都・海士例
	C 2類		D2類

第2表 前田分類

- B類 「馬具として、鞍のみが粘土の板の貼付手法によって着装されているが、他の馬具、たとえば 手綱や尻繋などが線描き手法で表現されているもの。」
- C類 「馬具として、鞍のみしか認められないもの。」
- D類 「馬具としては、何等認められない裸馬。」

さらに、「各類とも1類に比較するとやや抽象化されているものを2類とした。」

この分類の基本も馬具の有無にあり、飾馬の場合は大場分類以上に主要な観点を具体的に採り上げ、細分(飾馬A・B類、鞍馬C類)したものとして評価できよう。ただし、前田自身も主観的と述べたように、各類を二つに分ける基準はあいまいで、筆者としてはD類以外にその必要性が認められないのである。

年代については、A 2類に当たる静岡県大沢窯跡例を7世紀後葉と押さえ、A 1類はこれより遡る。また、C・D類は奈良時代の遺構から発見されることが多く、古墳出土のものを築造当初のものか後世のものとするかの判定は困難と捉える大局的なものであった。編年的には飾馬から裸馬の流れであり、各類とも精から粗に変遷を考える。なお、その発生については出土場所の検討から、一元的なものとは考えられないと推測した。

1971年、小田富士雄は「古代形代馬考」〔小田 1971〕に九州地方の土馬と沖ノ島祭祀遺跡の石製馬形を紹介し、「神の好み給う乗物を奉献することによって、神を慰め、神助を賜らんとする願望を込めた物であったと考えるべきであろう。それは生馬の奉献の簡略化として後続的に発生したものではなく、六世紀後半代にさかのぼって行われる所以のものであった。」と古代祭祀に占める馬形の性格を考察し、九州地方の出土資料(福岡県向野窯跡)からは6世紀後半まで遡れることを提示した。

また、小田は土馬の詳細な分類を試みなかったが、「須恵質、土師質の土質による分類のほかに、 形態的な相違が指摘できる。先ず大別して裸馬と鞍、手綱、革帯などを付した飾馬とに分けられる。」 と、飾馬と裸馬、そして須恵質・土師質に大別する。次いで、肥後地方の土師質土馬を肥後形式と仮 称し、鞍上に何かが乗っていたと指摘した。注目できるのは、豊前の新資料(苅田町新津出土)の製 作技法である。これは、後に木村泰彦が評価する古式の土馬に多く認められた円棒を胴の芯にして粘 土を巻きつけ、最後に芯を抜き取る技法であった。

さらに、滑石製馬形についても「大別して鞍をつけた飾馬と裸馬の二形式に分けられることはこれまでと変わらない。(中略) 両形式とも写実的なものから省略形へという経過をたどる」と述べた。土製馬形の編年にも、相通じるものがある。なお、年代は第3次調査の第1号遺跡に大量の馬形品を発見したことから、8世紀以降9世紀代に限定されると修正した。これにより、大場磐雄と原田大六の年代観は変更を余儀なくされたのだが、近年では群馬県長根羽田倉遺跡に6世紀後半から7世紀前半代のものが出土している。律令期に入って出現するという木製馬形の年代を追い越し、土製馬形の初現時期に近づいたのである(なお、大阪府長原遺跡には5世紀末の頭・胴部のみの立体的な木製馬形がある)。

この後、小田は真野和夫と連名で「土馬」[小田・真野 1981] 論を発表した(書籍の発行年ではなく 執筆時の年代を優先し、ここに掲載する)。

形態分類は、飾馬と裸馬の二つに分け以下のようにまとめた。

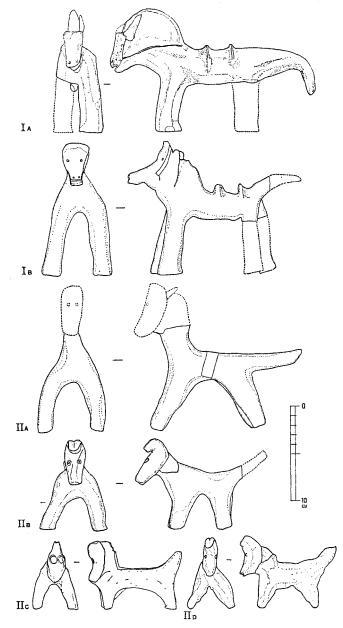
- A 飾馬「1 面繋・胸繋・尻繋・轡・手綱・鞍・鐙などの馬具を、粘土貼付手法によって着装したもの。
  - 2 手綱・面繋などは線描きによって表現し、粘土貼付手法との併用が行われたもの。
  - 3 馬具としては貼付手法による簡単なつくりの鞍のみしかもたないもの。|
- B 裸馬「細分するにたる共通した形態上の特徴を見出すことはできない。(中略)『橿原型』(中略)の特殊な形態のほかに、写実的な馬の表現をした裸馬もたくさん存在することも忘れるべきではない。」

内容的には前田分類と大差なく、裸馬の細分も行っていない。しかし、古い(写実的)タイプの裸 馬が存在することを指摘した点は大きく評価できるのである。なお、年代については触れていない。

1972年、大場磐雄の責任編集による『神道考古学講座』の刊行が始まった。この第2巻に、近藤正〔近藤1972〕が山陰の土馬を「土師質飾馬・陶質飾馬・陶質裸馬」に分類した。各型式の詳細な年代は示さなかったが、6世紀後半に始まると指摘している。この点、山陰地域では飾馬と裸馬が共に、6世紀後半に存在することが注目できよう。

1975年(昭和50年代)、藤原宮の土馬を報告した泉森皎が「大和の土馬」 [泉森1975]に、確実な遺構からの出土品とこれに伴出した遺物の整理から 形式分類及び編年が可能と考え、奈良 県内の出土例をもとに以下の二種六類 に分類(第2図)する方法を提示した。 まず第Ⅰ類として装鞍馬、第Ⅱ類として裸馬の二種に大別し、それぞれ以下 のA・Bの二形式とA~Dの四形式に 細分する。

第 I - A類 藤原宮東北隅出土例を代表とし、鞍・立髪・手綱・ 面繋を表現する。前額部・ 耳・立髪・鞍は粘土の貼付け。両眼と鼻孔は竹管、 手綱・面繋は線刻で表現する。



第2図 泉森分類(泉森1975より)

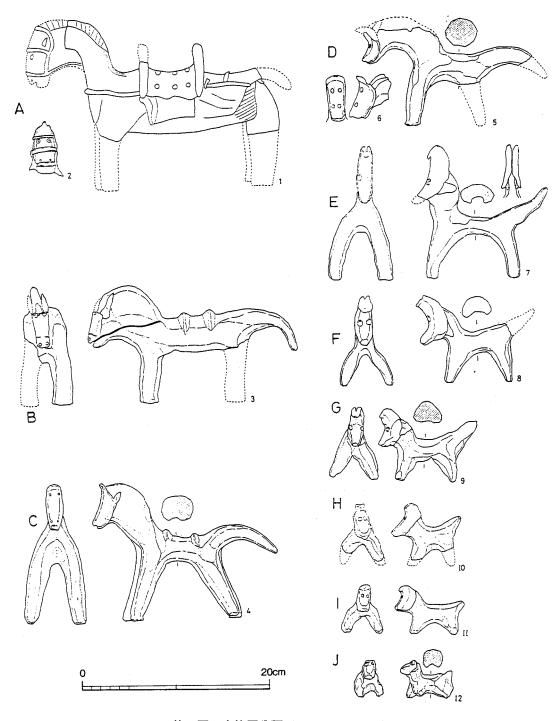
年代は、藤原宮造営直前と考える。

- B類 飛鳥坐神社下層出土例を代表とし、面繋・尻繋の箆描表現がなくなる。鞍・前額部・耳は粘土の貼付け。眼と鼻孔は竹管で表現する。 年代は、藤原宮~平城遷都直後とみられる。
- 第Ⅱ A類 藤原宮西南隅 SD223 出土例を代表とする。馬具をつけていない裸馬で、脚はすんなり伸び、尻尾は斜め上にまっすぐ延びて、首・脚・尾は同一の粘土塊から引き延して作り出されている。額面は円形の粘土板を折りまげて、首の部分にはさみこむように作っている。年代は、奈良時代前半期の形態と考えられる。
  - B類 奈良市西九条町出土例を代表とする。第Ⅱ A類より小型化してくるが、額面の作り方は同じである。尻尾は細くて短く、斜め上方へ伸びている。頸部の側面に粘土で耳を表し、眼は竹管を押して表現するが、鼻孔はみられない。年代は奈良時代の中頃と推定するが、第Ⅱ A類と共存の可能性もある。
  - C類 橿原遺跡九号井戸出土例を代表とする。製作技法は第Ⅱ B類と共通するが、立髪・耳・ 額面の表現にくずれが目立つ。脚や尻尾も短くなる。年代は奈良時代後半~末頃と考え られる。
  - D類 平城宮大膳職の井戸出土例を代表とする。製作技法は第Ⅱ-B・C類と共通するが、小型化が進み、額面はくずれてきている。年代は、平安時代初頭と考えられる。

分類の基準は、やはり大場・前田分類と同じ馬具の有無である。これを、さらに一歩押し進め頭部 や顔面等の製作技法を観察し、裸馬を細分したことが評価できる。編年は装鞍馬から裸馬の流れであ る。

年代については概ね妥当と言えるが、奈良県内出土品を資料としたため、古墳時代の土馬を予想しながら出現を7世紀後半で止め、もう一形式古いものを設定しなかった点が惜しまれてならない。同年、平城京左京一条三坊出土の土馬を報告した小笠原好彦は「土馬考」〔小笠原 1975〕に基礎作業として地域ごとの形式編年を進めることが有効と考え、過去多くの資料がある畿内とその周辺の出土例を対象に2段階 10 形式の分類 (第3図)を提唱し、変遷の方向を示した。

- 第 I 段階 馬具を表現する段階である。粘土紐を貼付するものと、沈線によって描くものとがある。 顔面、頭部も細かに表現される。一般に大型で丁寧なつくりのものが多く、A~C形式の 三つに細分される。
  - A形式 馬具を粘土紐のみで表すものである。馬具として面繋、胸繋、尻繋、手綱、鞍、泥障、鐙などが表現されるが、一つの個体に馬具の全てがつけられるとは限らない(代表例として、梅原末治の報告にあった羽曳野市誉田例を挙げた)。前田分類ではA類にあたる。
  - B形式 粘土紐と沈線とを併用して馬具を表現するものである。馬具は鞍のみ粘土紐で表現し、面 繋、手綱は線刻する(藤原宮出土例を挙げる)。前田のB類・泉森の第 I - A類にあたる。
  - C形式 馬具の表現が粘土を貼りつけた鞍に限られるものである。前田のC類。
- 第Ⅱ段階 馬具が省略された、裸馬の段階のものである。頭部の先端はV字形をなし、顔面の表現も 省略化され、同時に小型化の過程をたどる。D~Ⅰ形式の7つに細分される。
  - D形式 C形式から、鞍の表現をとった形態である。尻尾は垂れ、顔面では口を欠くものがある。
  - E形式 粘土を折りまげて断面U字形の胴部をつくり、胴部の一部を凹ませて脚をつける。D形式



第3図 小笠原分類(小笠原 1975 より)

に較べて脚部がわずかに短めになり、尻尾をつきあげる。顔面では、鼻孔が省略され、眼 のみを表現する。

- F形式 E形式が小型化したものである。頸部が短めになり、脚部も太めで短くなる。
- G形式 E形式に較べてさらに小型化し、頸部・脚部ともに短くなり、尻尾も太く短くつきあげる。 顔面部の耳は、短く幅広い。表面をなでただけで仕上げる。
- H形式 G形式よりも一回り小型化。頸部・脚部・尻尾ともに短くなる。顔面部では耳の表現が省略される。

I形式 H形式をさらに小型化したもので、製作手法は変わらない。

J 形式 極端に小型化したものである。

そして、実年代は泉森と同様に出土遺構の伴出遺物を考慮して、以下のように述べた。

- ・第 I 段階のB形式は、藤原宮の造営年代に実年代の1点を求めることができる。
- ・C形式は、平城京造営のごく当初の古い様式に伴い、その年代は710年を中心とした一定幅が推測される。
- ・A形式は年代のきめ手を欠くが、形式変遷からみて7世紀後半およびそれ以前の年代が想定され、5世紀後半頃まで遡る可能性がある。
- ・第Ⅱ段階のD形式は、720年~730年代を推測しておきたい。
- ・E形式は、740年~760年代が想定される。
- ・F形式(以下、傍点は筆者が誤植を訂正)は実年代を知る例はないが、E形式とG形式の中間的な 位置にあることから、奈良時代末の780年頃を中心に想定したい。
- · G形式は、長岡京遷都後の9世紀前半とみてよい。
- ・ J 形式は10世紀前半とみられることから、その間のH・ I 形式は9世紀の中頃・9世紀末と考えて大きな誤りはないであろう。

分類・編年と年代観も概ね肯定でき、馬具を装着した飾馬から8世紀中葉には裸馬に変化するとした。特に、律令期の裸馬(橿原式)の細分はその到達点として評価できる。しかし、A形式(古墳時代)はあらゆる馬具装飾を含んだものであり、細分の必要性があること、そしてC形式以降のものは、泉森分類と同様都城域にしか適用できない点等、注意が必要である。さらに、この分類でも古墳時代の裸馬、そして畿外の律令期のものをどう位置づけるかが課題となる。やはり、小笠原自身が指摘したようにこの分類は畿内対応のものであり、地域ごとの編年を作るしかないのであろうか。

また、初源について「我国での馬による祈雨祭祀の採用時期は、下出氏が指摘しているように、中国 漢土の儀礼の移入であることや、A形式の土馬の年代を考慮すれば、おそらく畿内では帰化人によって 将来されたとみてよく、五世紀段階まで遡るであろう。土馬による祭祀も、それからそうへだたない時 期からなされたものと推測される」と祭祀の性格と共に渡来人に関して注目すべき発言をしている。

この発言から間もなく、1979年に重要な発見として大阪府四条畷市の奈良井遺跡で、犠牲獣とされる馬遺体と共に土製人形と小型土製裸馬が出土している。年代は5世紀の後半から6世紀初めで、馬飼集団の水神祭祀とされている〔野島1984〕。土馬の初源、そして人形とセットになるという祭祀内容を考える上でも注目すべきものであった。

ここまでを研究史の第Ⅱ期(発展期)として捉えたい。Ⅰ期で大場の創出した飾馬と裸馬に分ける 分類方法を、大場自身が再構成し、これを前田が取り入れたのである。さらに、泉森・小笠原が細分 し、橿原式(後の大和型、現在の都城型)を中心とする型式分類が学界の主流となっていった。

そして、この型式の鞍馬から裸馬へという変遷があまりにもスムーズであったため、全てのものが 飾馬から裸馬へという流れに陥ってしまったのである。

#### <第Ⅲ期>

1980年、木村泰彦は長岡京跡右京第26次調査報告のまとめに「今里遺跡出土の土馬について」〔木村1980〕を発表し、同遺跡出土の2例は泉森分類のI-A類より古くなり小笠原分類のA形式に当たるとして、以下のような特徴を抽出した。

「上限は、少なくとも6世紀後半まで遡るであろう事。胴部形成時に心棒を使用し、その痕跡の残るものがある事。ハケメを使用した調整を行なう事。腹部に穿孔されたものがあり、祭祀の際に後のものとはやや異なった使用法がなされたらしい事。かなりのバリエーションを有する事。」

そして、これら初期段階の土馬が藤原宮期に至ってほぼ定形化すると捉え、「馬具を備え、様々な 形態を有する段階」・「馬具を備え定型化する段階」・「裸馬の段階」の三段階の変遷を設定した。

これらの特徴は古墳時代の土製馬形を細分する上で間違いなく重要な要素であり、飾馬から裸馬への的確な段階設定と共に評価できるが、この時点では小田・真野が示した古い段階の裸馬に注意されなかったのが惜しまれる。

1981年、広江耕史が「出雲の土馬」〔広江 1981〕に島根県内のものを集成した。須恵質の裸馬が多く、大井古窯址群のように生産地を明らかにできるのが特徴となっている。なお、年代決定には小笠原分類を使用しているが、この地域でも年代幅の広すぎる第 I 段階 A 形式には難点があるようだ。

同年、大橋信弥も「近江出土の土製馬について」〔大橋 1981〕に地元出土のものを集成し、小笠原 分類の第 I 段階に対して近江の出土例から、以下のような問題点を指摘した。

「まず注意されるのは、製作者の関心として馬具の表現だけでなく、その各部の表現にかなりの関心がはらわれていることである。すなわち、耳・目・口・立髪をはじめ尻尾・体毛なども丁寧に表現しているのである。」

「第二に、そのほとんどの胴部構造が中空であることが注目される。これは第一点とも関連して、 埴輪馬の伝統をうけ、写実的な表現をとろうとするものであろう。」

「そして第三に、近江出土の土馬がいずれも第一段階に比定されるものでありながら、形態・表現 手法において、それぞれ特徴的なあり方を示している点が注意される。」

そして、第Ⅰ段階(古式土馬)と第Ⅱ段階(奈良時代の土馬)の形態的な違いである写実性を取り入れた形式分類が必要と、地域的な観点からの見直しを迫った。同感である。ただし、第Ⅰ段階のものが埴輪馬からの影響なのか、朝鮮半島の影響を受けた装飾付須恵器からなのかは明らかでない。

1982年になって、さらに同様の見解が越前からも発せられた。村上吉郎は「土馬祭祀と漢神信仰」〔村上 1982〕に北陸道のものを集成した結果、従来の「写実的なものから簡略化されたものへ・飾馬から裸馬へ」の型式分類には、地方のものを当てはめても有効とはならないと結論づけた。

そして、分類の要素として四脚の付け方(3種)や胴部断面の形態の変化(2種)・表面整形(2種)・ 焼成等を掲げたのである。

確かに、指摘のあった脚の付け方や胴部断面の形態変化は、大橋の言う古式のタイプに胴部を中空 にしたものが多く認められることからも、分類と編年研究に役立ちそうである。

続く1983年、黒崎直は「古代の信仰」〔黒崎1983〕に土馬の変遷として、「古い形式の土馬は、粘土紐や沈線によって馬具を忠実に表す『飾馬』であって、(中略)新しい型式の土馬は、馬というよりも犬に近い作りで、当然、馬具をもたない『裸馬』である。(中略)基本的に『飾馬』から『裸馬』へ、大型品から小型品へである。年代の明確な最古の土馬は、奈良県藤原宮跡から出土したもの(後略)」と、律令祭祀開始期にあたる天武・持統朝の7世紀末頃を境として大量に出現し、系譜はそれ以前に遡るものと自身の見解を簡潔に取りまとめた。課題は、やはり都城型を使用しない地域での変遷と、古墳時代の土馬の祖源である。

同年、水野正好も「馬・馬・馬ーその語りの考古学」〔水野1983〕の中で、土馬の世界について「前

代、各地では胴の太い馬体、写実的な馬首と馬面、鞍や装具で美しい飾り馬として実際の馬を彷彿させる姿形で造形されていた土馬が、突如その姿を代え都城・国府・郡衙といった国家の行政機構を中心に新らたな土馬 – 馬形が誕生してくるのである」と、古墳時代の生き馬を模した土馬から定形化する土馬を律令制祭祀の中で捉え、その性格を大祓に求めるという優れた見解を披瀝したのである。

さらに同年、静岡県静岡市の神明原・元宮川遺跡では、旧河道内より古墳時代後期から奈良・平安時代の土馬が大量に発見されたという報道があった。年代幅が認められるものの、土製人形とセットで使用されたものがあり、非常に注目される資料である。

翌 1984 年、前年に緊急調査された福島県本宮町天王壇古墳の報告書〔山崎 1984〕が刊行された。 土馬は、小型であり粘土の塊を捏ねて造ったものとして紹介されているが、形態的には埴輪馬に近い。 鳥形埴輪等と共伴し、年代的(5世紀後半)にも土馬の祖源と考えられるものである。

同年、巽淳一郎が『平城京右京八条一坊十一坪』の報告書〔巽 1984〕に、8世紀初頭から9世紀前半までの時期に当たるSD920出土の土馬をIからWIの七型式に分類した。大和(都城)型土馬でありここでは各型式の特徴を記述しないが、製作手順が復元され、長岡京の時期を境に二分できるという点が注目できよう。これは、木製祭祀具である人形の首から肩への切り欠きが、長岡京期になで肩から怒り肩に変化するのと同様の展開なのである。また、I型式(8世紀初頭の段階)に都城型土馬への定型化が窺えるというのである。

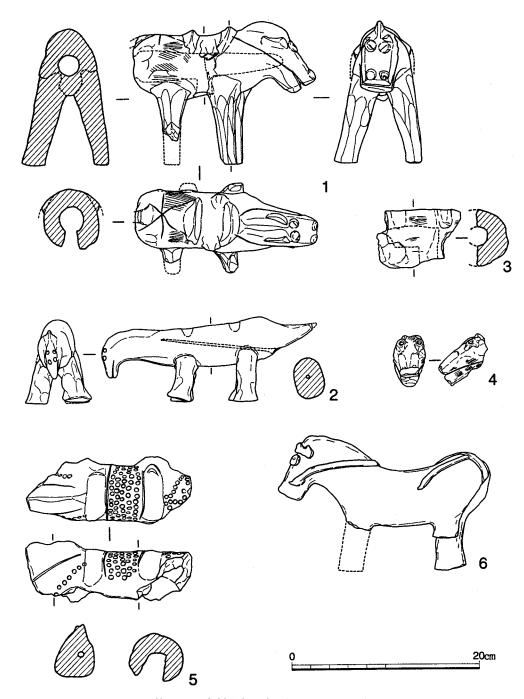
1985 (昭和 60) 年、国立歴史民俗博物館研究報告の第7集『共同研究古代の祭祀と信仰』が発行され、金子裕之は「平城京と祭場」〔金子 1985〕に、土馬の初源は古墳時代に遡るようであり「こうした初期の土馬と、8世紀に平城京において展開する土馬(大和型と仮称)の祖型である藤原宮跡下層溝 SD1901 A出土の土馬との系譜関係は、かならずしも明らかでない。」と、古墳時代の土馬から定型化した律令期のものへの連続性について明言しなかった。前記した水野の性格付けが影響し、古墳時代のものまでも祓とするのに迷ったということであろうか。なお、附篇として全国出土祭祀遺物の集成が行われている。研究者には、何とも重宝な文献である

1986年、木村泰彦は「乙訓出土の土馬集成」〔木村1986〕に前述の考え方を再整理し、飾馬・裸馬に捉われない、定形化した類とその前後の類に分ける三分類案を提示した(第4図)。

- A類 「形態的に様々なバリエーションを有し、基本的には馬具装着をするものをいうが、中に裸馬をも含んでいる。小笠原氏のA形式に相当する。(後略)」
- B類-「馬具を備え定形化する段階のもので、小笠原氏のB・C形式にあたる。ここにいう定形化とは藤原宮下層 SC140 出土土馬に代表される土馬の形態の統一を指す(大和型)。(後略)」
- C類 「粘土紐による鞍の表現を行わないもので、小笠原氏のD~J形式にあたる。(中略) しか し初期のものには背中に明らかに鞍の痕跡であるナデによる凹みが残されており、(中略) さらに墨書による馬具の表現が見られる。(後略)」

そして、各類の形態・成形・調整・焼成の特徴を示した。A類については、一次調整にハケメを施す。首を低く前方に伸ばす。棒状のものを芯にして成形し、抜き取り後中空となる等を挙げている。 年代は、A類を5世紀後半まで遡る可能性を含めつつ概ね6世紀後半~7世紀末までに求め、B類を8世紀初頭とした。

B類の出現を黒崎・水野や金子と同様に新たな祭祀形態への移行と把握した点、そしてA類の裸馬の存在とC類での墨書飾馬の確認が大いに評価できよう。また、様々なバリエーションを有するとし



第4図 木村分類 A 類(木村 1986 より)

たA類の特徴は、今後古墳時代のものを細分するにあたっての重要な要素と考えられる。なお、A類 →B類→C類(飾馬から裸馬)の流れで考えるなら、A類に裸馬を含めるのは疑問である。裸馬に古 いものが存在するなら、裸馬のみの変遷を考える必要があろう。

同年、馬の博物館(根岸競馬記念公苑)において「特別展古代文化・馬形の謎」[馬の博物館 1986] が開催された。土馬については「各地の土馬には時代がくだっても古墳時代の作例を彷彿とさせるような形のものが残っており、(中略) ごく大まかに飾り馬から裸馬へ、写実的なものから形式化したものへの展開が予想される」と捉え、現時点での明確な形式変遷は辿りづらいと結んだ。なお、山陰や東海地域には窯跡出土のものが多くあり、地域ごとのまとまりも指摘された。そして、展示図録には全国の「馬形出土地表」を集成している。

1988年、錦織慶樹は薦沢遺跡・別所遺跡報告書〔錦織1988〕の執筆にあたり、土馬の大小に注目して四つに分ける案を提示した。

I式 大型のもの (胴部の長さ12~13cm)。

II式 中型のもの (胴部の長さ8~11cm)、さらに飾馬・裸馬或は性別の有無で $a \sim c$  類に細分する。

Ⅲ式 Ⅱ式を一回り小型化したもの (胴部の長さ6~7cm)、さらに飾馬・裸馬と性別の有無で a~ d類に細分する。

IV式 Ⅲ式を更に小型化したもの(3.5~5.5cm)、さらに飾馬と裸馬のa・b類に分ける。

遺跡(地域)の状況に合わせ、大型品から小型品への流れを時間軸(年代差)として把握する山陰型の分類と言える。年代はI式が6世紀後半を遡ることはないとし、II式を6世紀末~7世紀前半、II式は7世紀前半以降、IV式は9世紀までの時期と想定した。また、祭祀内容と関わるのか雌雄性別表現の多いこともこの地域の特徴として挙げられ、分類にも取り込まれている。

こうした中で、小型 (新しいもの)の中に飾馬が存在することを指摘した点や、形態差の少ない裸馬を大小の数値で編年した点は大いに評価できるのであるが、各式に飾馬と裸馬が存在するならば、まず飾馬と裸馬に分けるべきでなかったかと考える。さらに、大きさにこだわりすぎると寺ノ脇遺跡やタテチョウ遺跡出土の土馬が共伴土器類より古くなってしまうのである。

また同年、神明原・元宮川遺跡(『大谷川Ⅲ』遺物編)の報告書〔寺田 1988〕が刊行された。土馬は形状・手法・大きさ等により、A~Eの五つに分類(大きさはこの順で小型化していく)している。伴出した土器を根拠に、最も古いと考えられるA類(写実的なもの)は6世紀末葉。B類(胴部がそのまま頭部に連続するもの)は7世紀前半代に現れ、後半代に盛行する。C類(胴部断面が縦長の楕円形で、四肢がハの字状につくもの)・D類(頭を頂点に、四肢が二等辺三角形状を呈すもの)はB類とE類の中間に位置し、およそ奈良時代の範疇に収まる。E類(三角柱状の土の塊)は8世紀以降と推測されている。共伴の土器から考えれば妥当とも思うが、これらの土器が河道出土のため原位置を保っているのか検証が必要となろう。

ここまでが、研究史の第Ⅲ期(展開期)である。主流であった泉森・小笠原分類に対して、各地域からの批判・疑問の声が起こったのである。古墳時代として確実な小型土製馬形が発見されたこと。さらに、初源を考える上で重要な埴輪と共伴した土馬の発見。そして、律令期に入ったにも拘らず木製模造品と異なり、全国各地に定型化した都城のものが拡がらなかったため、畿外地域での発見例(古墳時代の型式が残る)が増加すれば、畿内地域(大和・都城型)を中心にした小笠原分類等では収まらないものが見られたのも、当然といえば当然の成行きであった。

こうした視点から生まれたのが飾馬・裸馬に捉われない木村分類であり、大きさを基本に山陰地域 の編年を考えた錦織分類であった。

また、この期の特徴として定型化(大和・都城型)の出現を、黒崎や水野さらに金子が木製模造品 と併せ律令制祭祀形態への移行と把握した点が挙げられる。課題は、木製模造品と異なって、何故こ の型の土馬が全国に波及しなかったかである。

## <第Ⅳ期>

1991年、金子裕之は「律令期祭祀遺物集成」〔金子1991〕の中で、「土馬は古墳時代の後期に出現し、福島県天王壇古墳では埴輪馬と共にある。」と初源について、埴輪馬からの流れも示唆した。天王壇のものを埴輪に含めるか小型土製馬形とするか議論の分かれるところであるが、飾馬はいずれにしても森浩一〔森1974〕以来指摘されてきた埴輪馬の影響を受けているのは間違いないところであろう。

さらに、「古墳時代の土馬は、地方によって作り方に違いがある。そのひとつが、胴体を中空に作るもの。 (中略) 鞍は粘土貼つけにより、手綱や、面繋、尻繋などは、陰刻と円形竹管文等により表現することが多い。こうした古墳時代以来の技法は、地方によっては律令期にも認めうる。」と古墳時代の土馬の特徴を示し、地方では律令期に入っても古墳時代の型式が残ると捉えた。

また、「8世紀初頭の平城京において、顔の側面形を三日月形に作る大和型の土馬が出現し、土馬の製作方法・形態は大きく変化した。7世紀末、藤原京時代の尻尾を垂らした土馬の伝統は8世紀初頭にも遺存するが、8世紀中葉以降には尻尾をピンとはね上げるようになり、作り方も粘土板を折り曲げ、脚などを引き出すため、胴体の断面が逆U字形を呈する。この後、次第に小型化、9世紀の中葉には犬形と見紛らわすほどになり、10世紀前半を境に消滅するらしい。大和型土馬は、平城京・長岡京・平安京を中心に分布し、(中略)古代都城の所在地を外れるとその出土遺跡・数は極端に減る。(中略)なお、各地の系統は十分に解明できていないが、北陸や、山陰 - 特に島根 - 、九州地方などは独特の様相を呈す。」と大和型を中心に、現時点での地域的な律令期の様相を的確に取りまとめた。1996年、巽淳一郎〔巽1996a〕は金子のいう大和型土馬を「都城型」と名称変更し、『まじないの世界 II』〔巽1996b〕の執筆に当りこれらを小笠原分類に準じて飾馬から裸馬、そして大型品から小型品へといった時間軸の流れに置いた。また、古墳時代のものについて一概に論じられないが「大型で胴が長く、体長に比し体高が低く、頚も短く頭を高くもたげた例は少ない」と形態的な特徴を抽出している。

金子同様に分類案は提示しなかったが、古墳時代のもの(特徴)についての指摘は実に的を射たものである。古墳時代の型式を設定する上で、取り上げたい。

同年、神明原・元宮川遺跡と同じ静岡県西畑屋遺跡で、7世紀前半~8世紀前半にかけての河川跡から大量の土馬が出土した。ここでも、一部の馬形は人形とセットになると報告 [太田 1999] されている。さらに、2000年になって柴田睦は静岡県恒武西宮・西浦遺跡の報告書 [柴田 2000] に、当該地域の土馬のモデルとなったのは、同遺跡からも出土している尻尾を跳ね上げた形態の陶馬と考えた。正鵠を射た素晴らしい着眼点である。これで、神明原・元宮川遺跡等の土馬は型式学的に律令期のものと判断できよう。

ここまでが、西暦 2000 年までの状況である。金子による全国の集成が行われ、古墳時代の形態的 特徴は押さえられた。しかし、初源期と律令期の畿外を含めた全国的な型式分類はいまだ提示されて いない。律令期に入っても、古墳時代の型式が残る地域が多いのであれば、地域ごとの分類・編年を 作るしかないのであろうか。第Ⅲ期で課題となったこと(畿内中心史観)がいまだ解決されず、第Ⅳ期(停 滞期) は現在も継続中である。

こうした中、初源の問題では馬形埴輪とは別に、小笠原の指摘した渡来人(馬飼集団・朝鮮半島の装飾付須恵器等)の影響も大きいのであろうか。土製人形とセットで出現した裸馬である奈良井遺跡等の古墳時代例は、こうした可能性が高いことを感じさせる。なお、私見では裸馬の写実的なもの(兵庫県東有年・沖田遺跡等)は生き馬を模したものと捉え、埴輪や装飾付須恵器の影響でもないと考えている。

さらに、沖ノ島遺跡で広く周知された石製馬形の初源が、群馬県長根羽田倉遺跡出土品〔鹿沼 1990〕から古墳時代後期(6世紀末~7世紀前半)に遡ることが明らかになった。古墳時代の土製馬形の影響が考えられ、律令制祭祀の先駆けとも捉えられる。また、木製馬形にも古墳時代の立体馬形が発見され(大阪府長原遺跡〔絹川 1998〕)、かつて大場が示したように、土製馬形だけではなく石製・木製馬形を含めた馬形遺物全体で捉える必要性も見えてきたのである。

## 3. 小型土製馬形の型式分類案

さて、研究史の中で土製馬形分類の基準として取り上げられた要素は、

- ① 馬具(鞍・杏葉等)の有無と表現方法〔大場分類・前田分類等〕
- ② 土師質と須恵質〔小田分類・近藤分類〕
- ③ 頭部と顔面等の製作技法〔土井分類・泉森分類・小笠原分類等〕
- ④ 大きさ (胴部の長さと最大径) [錦織分類]
- ⑤ 胴部の作り(中空・尻部からの抜取穴)[小田分類・大橋視点等]
- ⑥ 頸を低く前方に伸ばす(頭をもたげない)〔木村分類・巽視点等〕
- (7) 表面整形の技法〔木村分類・村上分類等〕
- ⑧ 四脚の付け方〔村上分類〕等である。

研究史で見てきたように、これらは②を除いて、編年を行うための有効な要素であることは間違い のないところである。

筆者も基本は、①の馬具の有無とその表現方法を用いて分けてみる。しかし、村上・錦織等も指摘したように必ずしも飾馬から裸馬への変遷のみではない。大場の指摘にもあるように、時間差だけでなく祭祀内容により異なった可能性も高い。そのため、飾馬は飾馬、裸馬は裸馬とそれぞれの変遷を考えなければいけないのである。そして、細分には⑥・⑦の馬本体の形態と表面整形技法を使用する。これらを活かして作り上げた分類が、第5図の試案である。

まず、馬形を馬具の有無から飾馬と 裸馬に大別する。なお、これまでの研究は杏葉等の装飾具が無くても飾馬と する傾向が見られた。そこで、本稿で は混乱を避けるために、名称を飾馬(I 類)・鞍馬(II類)・裸馬(II類)と第3 表のように機能から定義しておきたい。

名	称	飾馬	鞍 馬	裸馬	
機能	代表的馬具	持つ○ 持たない×			
制御	轡・手綱	0	0	O·×	
安定	鞍·鐙	0	0	×	
装飾	杏葉等	0	×	×	

第3表 馬形遺物の名称と馬具の関係

次に、馬本体の形態及び整形技法と馬具類の詳細な表現方法の違いを用いて、各類ごとに第1型式から第4型式の四つの段階を設定する。さらに、律令期の畿外を考慮し、各類に地域色の強い第5型式を設ける。

I類 第1型式 形態は頭を軽く持ち上げ、大型で胴部の長いものが多い。埴輪からの影響で生まれる。胴部は中空に作り、断面は円形を呈す。表面はナデ調整、一部刷毛目を施す。耳・立髪は粘土を貼り付け、目・鼻は棒状工具で穿ち、口をヘラ状工具で刻む。さらに、立髪に線刻を施すものもある。

馬具類は面繋・胸繋・尻繋と鞍・障泥及び鐙、手綱等を粘土紐等で貼り付ける。なお、古いものは、鞍を前輪・後輪とも直立(垂直鞍)に付け、新しくなると後輪が斜め(傾斜鞍)になるものが現れる。これを用いて、さらにa型とb型に細分することも可能である。典型例は、大阪府陶邑大庭寺遺跡や同古市遺跡(梅原末治報告)出土品。

第2型式 形態は、頭を持ち上げず真横に伸ばしたもの(頭部の位置が胴部の高さとほぼ同じ)。 胴部は中実と中空のものがあり、断面は円形を呈す。調整等は第1型式と同様であ る。馬具類は、年代が新しくなるに従い障泥・鐙が粘土の貼り付けからヘラ描きに

	第1型式	第2型式	第3型式	第4型式	第5型式
I					The state of the s
類	大阪 古市遺跡	大阪 菱木下遺跡	鳥取 陰田隠れが谷遺跡	京都 長岡京跡	兵庫 南台遺跡
п		271123	NOTE PARTIES OF PARTIES	M	<i>a</i>
類					
7.5	福島 天王壇古墳	京都 今里遺跡	奈良 藤原宮跡	奈良 平城京跡	静岡 西畑屋遺跡
ш					
類	大阪 長原遺跡	奈良 島庄遺跡	島根 蔣沢 A 遺跡	京都 長岡京跡	静岡 恒武・西浦遺跡

第5図 試案型式分類図

変わり、途中からは省略される。また、鞍も後輪が斜めになる傾斜鞍が増え、垂直 鞍との比率は半々か。さらに、面繋・胸繋・尻繋及び手綱が粘土紐の貼り付けから、 随時へラによる線刻もしくは竹管刺突による表現に変わる。典型例は大阪府菱木下 遺跡、同森の宮遺跡出土品。

第3型式 第1型式と同じように頭を持ち上げた形態で、新しくなると若干小型化する。胴部 は中実と中空に作るものがあり、断面は円形から縦長の楕円形となる。

面繋・胸繋・尻繋及び手綱の表現は粘土紐を使用するものから、徐々に竹管刺突やへラ描きによる線刻に変わる。垂直鞍と傾斜鞍の比率は半々であるが、直立に付けるものの前輪と後輪を横断する断面形態は短い(低い)U字形となる。なお、稀に鞍までもへラ描きのものがある。第1型式との大きな違いは、馬具の表現方法を除くと表面の調整がヘラケズリかナデのみで、古い7世紀代のものにしか刷毛目が見られないことである。典型例は大阪府島上郡衙遺跡、奈良県調子丸古墳、鳥取県陰田隠れが谷遺跡、滋賀県北桜南遺跡出土品。

第4型式 都城型と呼称されたものの中に、形態上は裸馬であるが、墨書で鞍等の馬具を表現 したものがある。これを飾馬と捉える。典型例は、京都府長岡京遺跡出土品。

第5型式 第2型式と第3型式の中間的な様相を示すもの。

胴部を湾曲させ、尻尾を上方に跳ね上げた形態が特徴となる。断面は縦長の楕円形 を呈す。陶馬が多い。

馬具類の表現は粘土紐を貼り付けるものと、竹管刺突もしくはヘラ描きによるものがある。典型例は、兵庫県南台遺跡や静岡県古見大沢1号窯跡出土品。

Ⅱ類 第1型式 形態は頭を持ち上げ、体長に比較し脚部が短く太い。

胴部は中実と中空に作るものがあり、断面は円形を呈す。表面はナデ調整、一部刷 毛目を施す。耳・立髪は粘土を貼り付け、目・鼻は棒状工具で穿ち、口をヘラで刻む。 面繋・手綱は粘土紐の貼り付け。鞍は前輪・後輪とも直立する垂直鞍である。典型 例は福島県天王壇古墳出土品。

第2型式 形態的に、頭を持ち上げず真横に伸ばしたもの(頭と尻尾が同じ高さになる)。 胴部は形成時に使用した芯棒跡が残る等、中空となるものが多い。断面は円形、も しくは縦長の楕円形を呈す。古い時期のものは、刷毛目調整を施している。 面繋・手綱はヘラ描き。鞍は、垂直鞍と傾斜鞍が半々である。なお、垂直鞍も前輪 と後輪を横断する断面形態は短い(低い)U字形となる。典型例は、京都府今里遺 跡出土品。

第3型式 頭を軽く持ち上げた形態で、第1型式よりも若干小型化する。 胴部は中実作りで、尻尾を長く下げる。断面は、円形から縦長の楕円形となる。 面繋・手綱はヘラ描き。鞍は、垂直鞍と傾斜鞍が半々であるが、垂直鞍は第2型式 と同様に前輪と後輪を横断する断面形態が短い(低い)U字形になる。典型例は、 奈良県藤原宮・京跡や三重県斎宮跡出土品。

第4型式 都城型と呼ばれたものの中で、鞍が残るもの。

棒状の粘土塊から、頸と尻尾をつまみ出す。胴部断面は横長の長楕円形、もしくは 隅丸長方形となる。脚は別の粘土棒を差し込み、長く伸ばす。頸の上には、顔部の 粘土板を挟みこむように載せる。顔面は三日月形、尻尾は長くて垂れ下がるもの(a型) が古く、跳ね上がるもの(b型)は新しい要素である。表面は丁寧なナデ調整を施す。 鞍は、背の部分にわずかな粘土を貼り付けて前輪と後輪を表現する。また、単に鞍 部分を窪ませただけのものもある。典型例は、奈良県平城京跡出土品。

第5型式 第2型式と第3型式の中間的な様相を示すもの。 I 類第5型式の影響で生まれ、一部、人形とセットになる地域色の強い型である。

粗雑な作りで、頭と尻尾が同じ高さになる形態が多い。胴部の断面は、縦長の楕円 形を呈す。典型例は静岡県神明原・元宮川遺跡、同西畑屋遺跡出土品。

- ■類 第1型式 頭を持ち上げた形態で、稚拙な作りの小型馬である。渡来系の人々の製作か。 胴部は中実作りで、断面は円形を呈す。表面はナデ調整を施す。立髪は体部から引き伸し、耳は粘土を貼り付ける。目・鼻は棒状工具で穿っている。典型例は大阪府奈良井遺跡、同長原遺跡出土品。
  - 第2型式 頭を持ち上げず、真横に伸ばしたもの。 I 類・II 類の第2型式の影響で生まれる。 胴部は中空のものと中実があり、断面は円形を呈す。生き馬のような肉感を持ち、表面は丁寧なナデ調整、古い時期のものは刷毛目が残る。手綱を線刻で表現するものもある。典型例は滋賀県和田遺跡、奈良県島庄遺跡、富山県小杉丸山遺跡、福岡県大宰府跡出土品。
  - 第3型式 頭を軽く持ち上げた形態。生き馬を模したと考えられ、馬の特徴をよく捉えている。 耳は粘土を貼り付け、立髪は頸部からつまみ出す。目・鼻は棒状工具で刺突、口は ヘラ状工具で切る。胴部断面は、円形から縦長の楕円形となる。表面はナデ調整。

古い時期のものは刷毛目が残り、胴部が中空である。また、一部には性別表現を施 したものが見られる。なお、新しくなると顔の鼻孔や口の表現が見られなくなる。 典型例は島根県薦沢A遺跡、大阪府宰相山遺跡、島根県才ノ峠遺跡出土品。

第4型式 都城型の鞍を持たないもの。

板状の粘土を逆U字形に折り曲げ、四脚・尻尾・頸をつまみ出す。胴部断面は厚板の蒲鉾形を呈し、腹部側が窪む。頸の上に、顔部の粘土板を挟みこむように載せる。顔部は三日月形で、尻尾は斜め上に伸びる(b型)。目は竹管で表現するが、鼻孔と口は徐々に見られなくなる。Ⅱ類第4型式より頸部・四肢が短くなり、さらに新しくなると共に小型化する。表面はナデ調整。典型例は、奈良県前川遺跡、京都府長岡京跡、平安京跡出土品。

第5型式 Ⅱ類の第5型式と同形態で、鞍を持たないもの。Ⅰ類第5型式の影響で生まれ、一部、人形とセットと考えられる地域色の強い型である。

粗雑な作りで、頭と尻尾が同じ高さになる形態が多い。胴部断面は、円形から縦長の楕円形となる。顔部に、目・鼻・耳等の表現がないもの(新しい要素)も出てくる。なお、年代が新しくなると第4型式の新しいもの(平城京・平安京出土の小犬型)と似た形態に変わる。典型例は静岡県恒武・西浦遺跡、同神明原・元宮川遺跡、同西畑屋遺跡出土品。

以上、3類15型式の分類になるのである。

## 4. 各類典型例の年代比定と型式変遷

では、第Ⅲ章で設定した分類試案による各類各型式の遺跡出土の具体例から、その年代と変遷を見てみよう。なお、年代基準となる須恵器と土師器は田辺昭三〔田辺 1981〕編年、もしくは西弘海〔1986〕編年を使用する。

各類とも基本的な年代変遷は、第1型式→第2型式→第3型式→第4型式(都城型)と考えられる。 さらに、畿外の大半の地域では第4型式の時期(律令期)に第2型式及び第3型式が変形しながら続いているのである。その典型例として、遠江地域のものを取り上げ第5型式とした。そして、Ⅲ類の第1型式を除き、時間軸は馬本体の「写実的」なものから「簡略化」されたものへと変化する。

## I 類第 1 型式 (第 6 図)

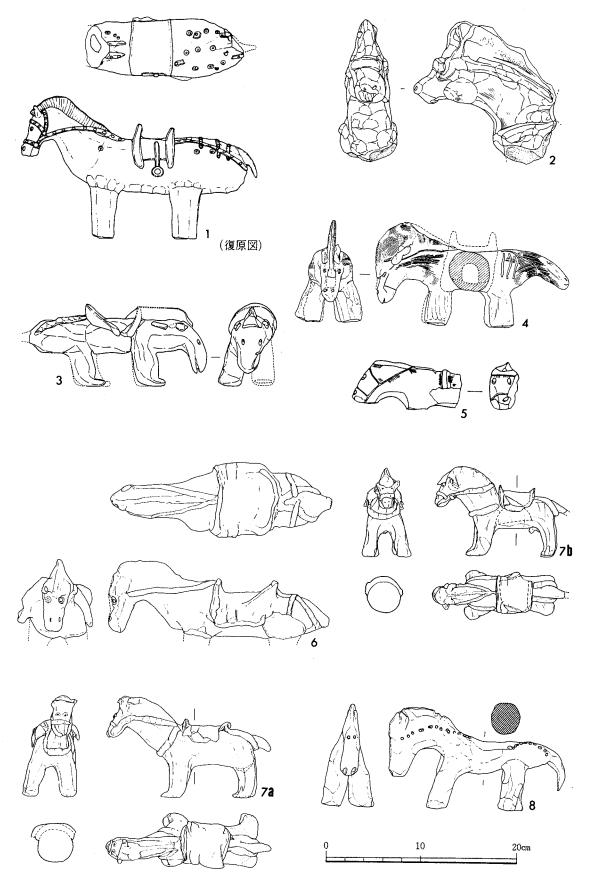
(1). 陶邑·大庭寺遺跡 (396-OS) 出土 [冨加見 1993]

平成2年、近畿自動車道松原すさみ線(海南線改称)建設に伴う側大阪府埋蔵文化財協会の調査で、 流路(溝)から発見されたものである。

396-OS は調査区中央から解析谷に向かって流れ込む自然流路で、古墳時代から奈良時代の須恵器・ 土師器と共に出土している。この内、須恵器は TK23 型式から MT15 型式にかけてのものが多い。 最下層には、初期須恵器も出土している。

土馬はどの須恵器に伴うのか特定し難いが、胴部に残る馬具(垂直鞍・輪鐙)の表現方法から考えて、 量が多い5世紀後葉から6世紀前葉に押さえておく。大阪府古市遺跡出土のものと共に、埴輪からの 影響を受けた土馬の最古型式と捉えている。

②. 高茶屋大垣内遺跡(SH52)出土〔田中2003〕



第6図 Ⅰ類第1・2・3型式(各遺跡報告書より)

平成9年、県立高茶屋病院整備事業に伴う三重県埋蔵文化財センターの調査で、竪穴住居 (SH52) から発見された頭部から頸部にかけてのみの破損品である。

SH52 は東半分が破壊された東西長約5 mの方形竪穴住居跡で、土馬は覆土上層から土師器・須恵器と共に出土している。これら須恵器の年代は、MT15 型式に相当する。なお、この住居跡は粘土塊が発見される等、土師器工房址の可能性が高い。土馬の年代は、須恵器と同じ6世紀前葉でよいと考える。

#### I 類第2型式 (第6図)

③. 菱木下遺跡 (SD07) 出土 [橋本 1985]

昭和59年、府道松原泉大津線の建設に伴う大阪府教育委員会の調査で、溝跡(SD07)から発見されたものである。

SD07 は谷状地形の上部に沿って半円形に巡る溝跡で、土馬はこの上層から口縁部を打ち欠いた 等多量の須恵器と共に出土している。なお、この溝は水田灌漑用の水路と考えられている。

これら溝出土の須恵器は、TK43型式~TK209型式に相当しよう。土馬も、6世紀後葉頃と捉えたい。

④. 森の宮遺跡 (第Ⅲ層) 出土 [佐藤 1994]

平成5年、地下鉄森ノ宮駅舎の建築に伴う側大阪市文化財協会の調査で、第Ⅲ層から発見されたものである。

第Ⅲ層は古代猫間川の堆積砂層で、土馬はこの層から多量の土師器・須恵器と共に出土している。 須恵器の年代は、TK217型式~MT21型式に相当する。

土馬の形態は頭を持ち上げず、頸も短く真横に伸ばすことから古く考えて、7世紀の中葉に押さえておく。前期難波宮の祭祀遺物(律令祭祀の先行形態)と捉える。

⑤. 住吉宮町遺跡 (SD05) 出土〔神戸市教育委員会 1997〕

平成8年、神戸市教育委員会が行った阪神・淡路大震災の復興に伴う共同住宅建設の調査で、溝跡 (SD05) から発見されたものである。

SD05 は第2遺構面で見つかった自然流路跡で、土馬は多量の土師器・須恵器と共に出土している。 須恵器の年代は、TK46 型式~TK48 型式に相当する。土馬は、7世紀後葉と捉えておく。

## I 類第3型式(第6図)

⑥. 田井野遺跡 (SH01) 出土〔柏原 1996〕

平成2年、山陽自動車道の建設に伴って兵庫県教育委員会が行った調査で、竪穴住居跡 (SH01) から発見されたものである。

SH01 は竈を敷設する南北 7.36 m×東西 6.68 mの竪穴住居跡で、主柱穴横の浅いピットから土馬が、 そして須恵器・土師器が床面から出土している。

床面出土の須恵器は、TK209型式に相当する。土馬は脚部を欠損するも、この時期(6世紀末から7世紀初頭)で問題のないものである。なお、頭の位置や尻尾の形態は第2型式に近いものがある。

⑦. 陰田隠れが谷遺跡 (炭溜4) 出土 〔 断米子市教育文化事業団 1998〕

平成2年、一般国道180号道路改良工事(米子バイパス)に伴う米子市教育委員会の調査で、2区3テラスの炭溜4から発見された陶馬である。

炭溜4は竪穴住居跡の窪地を利用した祭祀遺構で、須恵器・土師器と共に土馬が2点(雌雄を表現) 出土している。

これら須恵器は陰田7期の特徴を持ち、TK217型式に相当する。陶馬の年代は、馬具類が全て粘

土紐で表現される古いタイプであることを考え併せ、7世紀中葉としておく。

⑧. 北桜南遺跡 (SD01) 出土 〔森 1985〕

昭和59年、北桜地域のほ場整備に先立つ野洲町教育委員会の調査で、B地区の溝(SD05)から発見されたものである。

SD01 は中央付近で幅 1.2 m、深さ 0.6 mの南北に流れる溝である。この最下層から土馬が出土しており、中~上層には須恵器・土師器が見つかっている。

これらの須恵器は、TK46 型式~ TK48 型式・飛鳥のIVに相当する。土馬は形態が藤原京のものに近く、7世紀後葉と押さえて問題のないものである。

## I 類第4型式 (第7図)

⑨. 長岡京跡 (第8274次) 出土 [國下1984]

昭和58年、住宅建設に伴う向日市教育委員会の立会調査で、溝(SD827401)から発見されたものである。馬具類を表現したと考えられる墨線が、顔部・体部に描かれている

溝幅は  $0.6 \text{ m} \sim 0.7 \text{ m}$ ・深さは 0.2 mを測る。町割の溝と考えられ、土馬は土師器・須恵器と共に出土している。平城宮編年の $\mathbb{N}$ ・TK7 型式である。

土馬の年代は小笠原分類のE形式にあたるが、長岡京遷都後の8世紀後葉に押さえておきたい。

## I類第5型式(第7図)

⑩. 南台遺跡(B地区包含層)出土〔渡辺 1988〕

昭和56年、青野ダム建設に伴う兵庫県教育委員会の発掘調査で、B地区の包含層中から発見された須恵質のものである。

遺構の時期や包含層出土の須恵器は、主に TK46 型式~ TK48 型式・飛鳥編年のIVに相当する。 土馬の年代も、7世紀後葉に押さえておきたい。

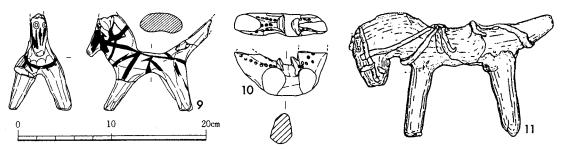
①. 古見大沢1号窯跡(焚口西側の落ち込み部)出土〔山村1966〕

昭和33年、それまで湖西町の窯跡の分布調査をされていた静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部 と湖西町教育委員会による学術調査で、1号窯跡焚口西側の落ち込み上部から発見されたものである。

1 号窯跡は3基確認した窯の中では最も新しく、第 V 群土器(平城宮編年Ⅲに相当する)を出土している。なお、発見当時の年代観では7世紀後葉とされ、前田豊邦等はこの年代で考えていた。

土馬 (須恵質) はこの1号窯に伴うもので、8世紀中葉に押さえておきたい。この他にも、同形態 の飾馬が数点見つかっている。

以上、I類は第1型式が5世紀の中葉から後葉の時期に出現し(埴輪の影響)、6世紀の後葉まで続く。このa型(垂直鞍)と共に、b型(傾斜鞍)が6世紀中葉から始まる。次いで、第2型式が6世紀中葉から7世紀後葉まで続いている。古い時期は、垂直鞍と傾斜鞍が併存する。さらに、第1型式



第7図 Ⅰ類第4・5型式(各遺跡報告書より)

の流れを引く第3型式は、写実的なⅢ類第3型式(初期のもの)の影響を受けながら6世紀後葉から8世紀末まで継続する(なお、基本的に鞍・馬具共粘土紐の貼り付けで表現するのは7世紀後葉まで、大沢は例外と捉える)。特に、畿外では平安時代初頭まで長期間見られる。

また、特異な第5型式(地域型)は陶質のものが多く、7世紀後葉から8世紀中葉までの畿外の窯業地域に見られ、これらがⅡ類・Ⅲ類の第5型式の出現に繋がる。

ここまで(第1・2・3・5型式)が、基本的に鞍を粘土紐の貼り付けで表現する型である。なお、 第3型式の終末には鞍まで線刻したもの(岐阜県稲田山13号窯出土品等)も登場する。

馬具類を墨書表現する第4型式(都城型)は長岡京期、8世紀後葉に都城域にのみ出土する。

## **Ⅱ類第1型式**(第8図)

⑫. 天王壇古墳(周濠)出土[山崎1984]

昭和57年、私道付替え等の工事中に埴輪片が発見され本宮町教育委員会の緊急調査で、古墳周濠内から発見したものである。

出土位置は帆立貝式古墳造り出し部直下の周濠であり、動物埴輪と共に2点が見つかっている。その他、土師器・須恵器や円筒埴輪・形象埴輪があり、これらの年代は須恵器が TK23 型式~ TK47 型式に相当すると考えられる。

土馬の年代も埴輪と同様に古墳の築造時期と考えられ、5世紀の後葉に押さえておきたい。

## ■類第2型式 (第8図)

(13). 今里遺跡 (第5層) 出土 [木村 1980]

昭和53年、外環状線工事に伴う京都府教育委員会の長岡京跡(右京第12次)の調査で、第5層から発見されたものである。

第5層は、長岡京の時期より古い古墳時代の遺物包含層である。そのため、遺跡名称も今里遺跡とされたようである。土馬はこの層の最上層から、須恵器・土師器と共に出土している。

これら須恵器の年代は陶邑 I 期(TK23型式)のものから II 期前半(MT15型式)と II 期後半(TK43型式) のものまであるが、土馬は最上層の発見ということから 6 世紀後葉に捉えておきたい。なお、同遺跡 (右京第 26 次) の調査でも SD1288 の溝内 (古墳時代後期) から、第 I 類第 2 型式のものが出土している。

## ■類第3型式(第8図)

(4) 藤原宮跡(東北隅)出土[泉森1969]

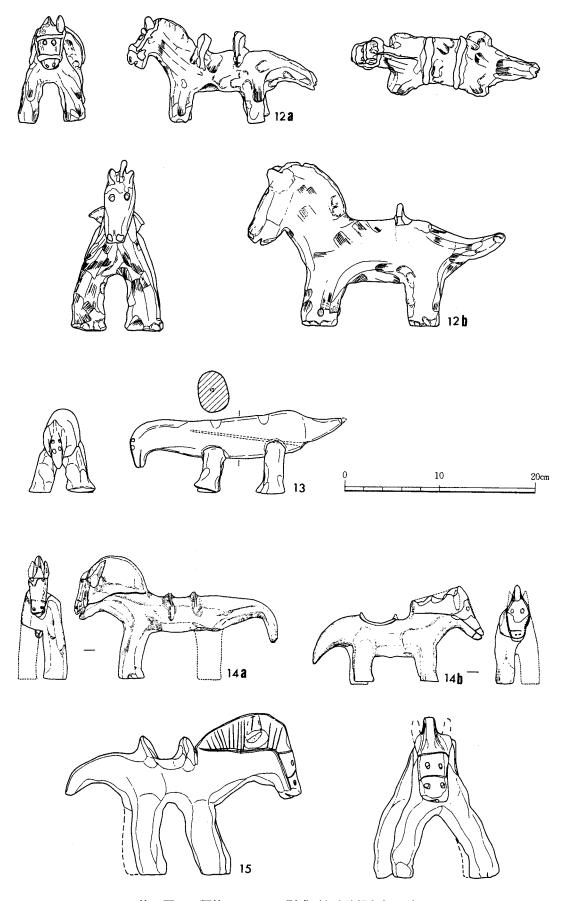
昭和42年、奈良県教育委員会が調査主体となった国道165号線バイパスに伴う藤原宮跡の宮域調査(第3次調査)で、東北隅から発見したものである。

宮域の外濠にあたる南北溝 SD170 の周辺(廊状遺構 SC140 を作るために整地したとみられる小溝他)からも、同型式のもの4点が出土している。特に、小溝には藤原宮 I a 形式の須恵器が含まれており、藤原宮造営直前と考えられる。

土馬の年代は鞍の作りに若干相違があるものの、全て7世紀後葉と捉えておきたい。同京跡出土で、奈良国立文化財研究所所蔵品 [馬の博物館 1986] にも同形態のものがある。なお、これらは都城型 (第4型式) の原形になったのであるが、畿内周辺の三重県天王平遺跡出土品や香川県下川津遺跡出土品等の新しい時期の I 類第3型式にも影響を及ぼしていると考えられる。

⑤. 斎宮跡(古里遺跡 B 地区)出土〔三重県教育委員会 1972 · 斎宮歴史博物館 1989〕

昭和46年、民間会社の団地造成に伴う三重県教育委員会の発掘調査で、B地区の黒褐色包含層中



第8図 Ⅱ類第1・2・3型式(各遺跡報告書より)

から発見されている。

包含層中には土師器・須恵器・瓦等の遺物があるが、年代的には奈良時代と鎌倉・室町時代の中世のものが大半を占める。この型式の土馬は2点が出土し、さらに I 類第 II 型式のものが大溝からと、C地区からも2点見つかっている。

土馬の年代は共伴土器から概ね奈良時代と考えるが、形態は藤原宮のものと同様であり、7世紀後葉から8世紀前葉の古い時期に押さえられる。

## Ⅱ類第4型式(第9図)

#### (6). 平城宮跡(SD485)出土〔小笠原1974〕

昭和44年、国道24号線バイパスに伴う奈良国立文化財研究所の調査(平城宮左京-条三坊十五・ 十六坪)で溝(SD485)から発見したものである。

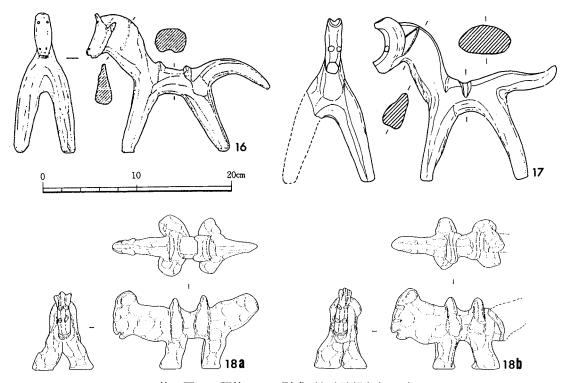
SD485 は第2次整地面から検出され、第3次整地の段階では完全に埋め立てられている。出土遺物には土師器・須恵器(平城宮編年Ⅱ)の他、紀年木簡(和銅6年、霊亀3年、養老7年)があり、奈良時代初期の遺構であることが分かる。この尾が下に伸びる土馬(a型)の年代は、8世紀前葉で捉えておきたい。なお、同溝からは鞍のない同形態の土馬(Ⅲ類第4型式)も見つかっている。

#### ① 平城京跡 (SD920) 出土 [巽1984]

昭和58年、大和郡山市の焼却場建設に伴う奈良国立文化財研究所の調査(平城京右京八条一坊十一坪)で、溝(SD920)の第3層から発見されたものである。

SD920 は西1坊々間大路 (SF910) の西側溝で、埋土の状況から概ね3時期に分けることができる。 A期は平城京造営当初の溝で、B期は平城宮編年Ⅱ・Ⅲの土器が出土した。C期は8世紀後葉から 9世紀前半と考えられる。

この尾が水平に伸び先端が上を向く土馬(b型)の年代は、出土層位からB期平城宮編年Ⅲの8世



第9図 Ⅱ類第4・5型式(各遺跡報告書より)

紀中葉と捉える。なお、同溝内には小笠原分類のC型式からH型式までの土馬 80 体以上が含まれている。

#### Ⅱ類第5型式(第9図)

图. 西畑屋遺跡(土器集積2)出土[太田1999]

平成9年、都市計画道路の建設に伴う側浜松市文化協会の調査で、西調査区の土器集積2から発見 したものである。

土器集積2は河川内の南岸に近い位置で、河川に並行して帯状に連なる土器類の集積遺構である。 須恵器壺類と土馬2点、土製人形2点、少し離れて土師器小碗類と須恵器甕が出土している。土器類 は、平城宮編年Ⅲに相当する。

鞍の表現に粘土紐を貼り付けたこの土馬の年代は、共伴の土器から8世紀中葉に押さえたい。その他、集積5では胴部を摘み出して鞍を表現するもの(型式学的には貼り付けるものより新しい)が多く見られる。神明原・元宮川遺跡 SR312 出土の鞍を持つものもこれと同形態であり、8世紀中葉以降の年代ということになろうか。この位置づけで問題ないと考えるが、あくまで神明原・元宮川遺跡等のA類は6世紀末とするならば、鳥取県クズマ遺跡等のⅢ類第1型式に入る可能性がないではない。なお8世紀中葉以降、遠江地域に土馬が盛行するのは『續日本紀卷第廿四』〔黒板1984〕天平寳字六年三月に記載のある旱天の被害が著しかったためと推測している。

以上、Ⅱ類は第1型式が5世紀の後葉に出現し(埴輪の影響)、6世紀後葉まで続く。次いで、第2型式が6世紀後葉から7世紀後葉まで見られる。また、第1型式の流れを継ぐ第3型式(藤原京跡にある都城型の起源を含む)が、7世紀後葉から8世紀前葉に出土している。

次に、都城型と呼ばれる第4型式は、8世紀前葉から中葉末まで認められる。なお、この型は8世紀後葉以降も裸馬として継続するのであるが、筆者の分類試案では鞍を持たないで尻尾を跳ね上げる長岡京期以降のものは、Ⅲ類(裸馬)の第4型式に遷ることになる。製作技法が大きく変化することも、類を替えた理由の一つである。

一方、第5型式は古墳時代の型式(第2型式)が旱天被害のためか残った畿外の地域(現状では遠江)で、8世紀前葉から9世紀前葉まで見られる。

## **Ⅲ類第1型式**(第10図)

(9). 奈良井遺跡 (祭祀遺構) 出土 (野島 1984、根鈴 1997)

昭和54年、市立市民総合センター建設に伴う四条畷市教育委員会の調査で、祭祀遺構をとりまく 溝内から出土したものである。

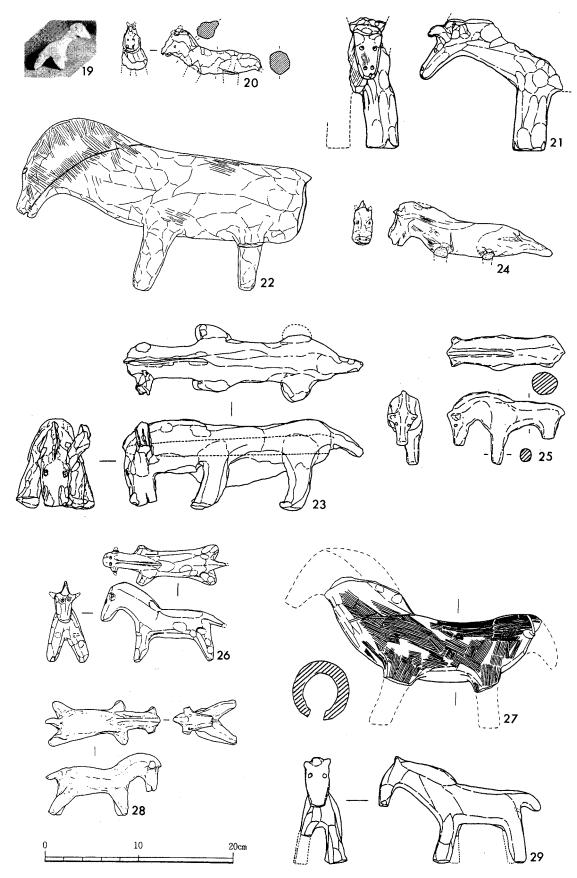
祭祀遺構は一辺約 40m のテラス(このうち半分のみ調査)で、これをとりまく最大幅約 5m・深さ約  $1m \sim 1.5m$  の溝内には、馬歯・馬骨合わせて 6 頭以上の馬が埋葬され、製塩土器・須恵器・土師器・韓式土器や土製人形と共に発見されている。須恵器の年代は、TK47 型式 $\sim MT15$  型式である。

土馬の年代は、須恵器から6世紀初頭頃に押さえたい。馬飼い集団(渡来人)の製作と考えられる。

② . 長原遺跡 (SD52) 出土 〔京嶋 1993〕

昭和60年、土地区画整理事業に伴って働大阪市文化財協会が行った発掘調査で、溝(SD52)から発見したものである。

溝は集落内の谷の斜面にあり最大幅 2.5 m、深さ 0.3 m~ 0.4 mを測る。この溝の西側から、須恵器・土師器と共に出土している。同溝東側では、子持勾玉も見つかっている。須恵器は、MT15 型式



第10図 Ⅲ類第1・2・3型式(各遺跡報告書より)

#### ~ TK10 型式である。

土馬の年代は、須恵器の新しい時期の6世紀中葉に押さえたい。また、これに近い形態の土馬が、 馬形埴輪も作っている埼玉県割山埴輪窯跡の第5号粘土採掘坑〔大和1981〕から出土している。

#### **Ⅲ類第2型式**(第10図)

②). 芝崎遺跡 (SD02) 出土 [別府 2007]

平成7年、一般国道175号の拡幅改良工事に伴う兵庫県教育委員会の発掘調査で、1区の溝(SD1002)から発見したものである。

SD1002 は東西に流れる幅約1 m、深さ約0.2 mの溝で、西端では古墳時代(6世紀後半)の竪穴住居跡の北側を囲むように湾曲している。共伴遺物には土師器・須恵器・飯蛸壺等があり、6世紀後葉から7世紀前葉と少し年代幅を持つと考えられる。

土馬は一部刷毛目を残し、体部のみならず脚部も中空を呈すること等埴輪馬に近い様相を示す。年代は6世紀後葉の古い時期に押さえたいが、当初埴輪馬の立髪の先端に着けた棒状突起の変形と考えた折り曲げた板状の突起が都城型の原形に似る。やはり、新しい7世紀前葉なのか。

②. 和田遺跡 (SD2) 出土〔野洲町教育委員会 1980、大橋 1981〕

昭和54年、宅地造成に伴う野洲町教育委員会の調査で、溝(SD2)から発見したものである。

SD2 は、集落の縁辺部に掘削された幅約2m、深さ約80cmの人工的な水路である。土馬は7世紀前半代の須恵器・土師器を大量に含む、中層と下層からバラバラの状態で出土している。なお、この溝は8世紀初頭には完全に埋没していたと考えられる。

土馬の年代は、出土土器と同じ7世紀前葉から中葉に押さえておく。

②. 大宰府跡 (SK2960) 出土 [九州歴史資料館 1987]

昭和61年、九州歴史資料館が実施した政庁跡後背地の調査で、土坑(SK2960)から発見した須恵質のものである。

SK2960 は井戸の掘形に似た上面径 2.6 m、深さ 1.8 mの大きさである。土馬は、この底部から少量の須恵器(TK46 型式・飛鳥編年IV)と共に出土している。政庁第 I 期の遺構である。

土馬の年代は、出土土器に併せ7世紀後葉と捉えておく。

②. 小杉丸山遺跡(旧小杉流通業務団地内 21 遺跡 106 号穴)出土〔岸本 1984〕

昭和58年、小杉流通団地の造成に伴う富山県埋蔵文化財センターの調査で、106号穴から発見した 須恵質のものである。なお、この遺跡は調査後に国指定史跡となり、保存整備されている。

106 号穴は粘土採掘坑と考えられ、長径 2.3m × 短径 1.0m の大きさである。土馬はこの底部から少し浮いた状況で、若干の瓦・土師器片と共に出土している。年代的には、飛鳥編年ⅡとⅢの間に相当する。

土馬の年代も7世紀中葉と考えておきたい。奈良県島庄遺跡 20 次調査出土品も、形態的・年代的 に近いものである。

## **Ⅲ類第3型式**(第10図)

②5. 東有年·沖田遺跡(SH03)出土〔赤穂市教育委員会1990〕

平成元年、ほ場整備工事に係る赤穂市教育委員会の事前調査で、竪穴住居跡3号から発見したものである。なお、頭を下げているが第2型式の真横に伸ばすものとは異なるため、この型に入れる。

竪穴住居跡3号は竈を持つ一辺約7mの方形住居であるが、およそ半分が調査範囲外にあるため正

確な規模は不明である。この床面から、土師器・須恵器と共に出土している。須恵器は、TK10型式の新段階(MT85型式)に相当する。

土馬の年代は、出土土器と同じ6世紀の後葉に捉えておく。生き馬を模した肉感的な形態の馬である。 ②6. 薦沢A遺跡 (SIO2) 出土〔錦織 1988〕

昭和59年、中国電力株式会社の北松江変電所新設工事に伴う松江市教育委員会の調査で、竪穴住 居跡(SIO2)から発見された須恵質のものである。

SI02 は一辺約6 mの隅丸方形住居と推測されるが、残存状況が悪いため正確でない。この床面から、土師器・須恵器と共に出土している。須恵器は、高広遺跡編年のⅠA期からⅡA期(TK43型式からTK209型式併行)である。

土馬の年代は、これら土器と同じ6世紀末から7世紀前葉に押さえておきたい。なお、薦沢A・B 遺跡では総数38点もの土馬(飾馬を含む)が出土している。

## ②7. 宰相山遺跡(道路側溝)出土〔積山1998〕

平成8年、真田山公園市営プールの建替えに伴う(助大阪市文化財協会の調査で、溝(道路側溝)から発見したものである。

溝は谷の方向と関係なく一直線に造られた道路跡の側溝で、前期難波京の方形土地区画の痕跡と考えられている。土馬は多量の土器や木製品と共に出土し、土器類は前期難波宮の時代7世紀後半とされているが、詳細は明らかでない。

土馬の年代は、7世紀中葉の新しい頃に押さえておきたい(体部に刷毛目を残す等、Ⅱ類第3型式の藤原宮出土のものより明らかに古く、頭部が欠けているものの都城型の先駆けといえよう)。

## 28. オノ峠遺跡(包含層)出土 [広江 1983]

昭和55年、国道9号線バイパス建設に伴う島根県教育委員会の発掘調査で、水田部下層(黒褐色土層) の包含層中から発見した須恵質のものである。

包含層中の遺物には、須恵器や土師器と共に土製模造品(手捏土器・土鈴・鏡・土玉等)、石製模造品そして木製模造品と桃の種子があり、祭祀遺跡と考えられている。須恵器の年代は、7世紀から8世紀後半にかかるものが混在している。

土馬の年代は明確にし難いが、同じ包含層中に鞍を有しその他の馬具類を竹管の刺突で表現する I 類第Ⅲ型式のものを含むことから、7世紀後葉から8世紀前葉に考えたい。同県内には土馬の生産址 (7世紀末) として知られる大井窯跡群があり、タテチョウ遺跡や寺ノ脇遺跡出土の裸馬も同時期のものと考えられる。

## ②. 各務寒洞 2 号窯跡(灰原)出土〔渡辺 1996〕

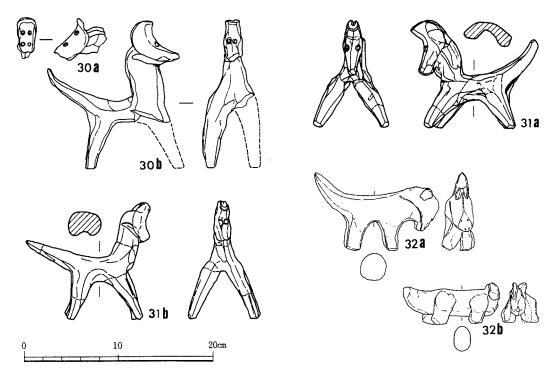
昭和58年、ゴルフ場のコース変更工事に伴う各務原市埋蔵文化財調査センターの事前調査で、2 号窯跡灰原から発見した須恵質のものである。なお、顔部には鼻の表現が認められない。

灰原出土の須恵器は、美濃須衛窯編年のⅣ期第3小期の終わりからV期第1小期の初め (TK7型式 ~ MT83併行) と考えられている。

土馬の年代は、8世紀末から9世紀初頭に押さえたい。同灰原には、同型式のものが他に3点ある。 ■類第4型式(第11図)

③ 前川遺跡(井戸2)出土〔黒崎 1974〕

昭和 47 年、前川筋河川局部改良工事に伴う奈良国立文化財研究所の調査(平城京朱雀大路)で、井



第11図 Ⅲ類第4・5型式(各遺跡報告書より)

戸2から発見したものである。

井戸2の大きさは一辺約80cmの方形で、現存の深さは2.2 mを測る。土馬は、多量の土師器と共に出土している。土器類は、平城宮編年のⅢである。

土馬の年代は、8世紀の中葉で問題ないと考える。この井戸からは2点が出土し、1点には鼻孔の表現がない。同型式でも、新しい兆候である。なお、祭祀の主体者について宮内と宮外では異なり、前川遺跡例は民間の祭祀という考え方がある〔臼杵1997〕。

## ③ . 長岡京跡右京第 689 次 (SX68905) 出土〔山口 2002〕

平成13年、(財)向日市埋蔵文化財センターが行った遺跡の範囲確認調査で、SX68905から発見したもの(47個体の出土があり、19点が図化)である。

SX68905 は流路が幅  $2 \, \mathrm{m}$ ほどの小川になった時、土馬やミニチュア竈・鍋が集中する  $4 \, \mathrm{m} \times 1 \, \mathrm{m}$  の範囲である。土馬は、土師器の壺(祭祀用)やミニ竈・鍋、そして若干の須恵器と共に出土している。 土器類は、平城宮編年の $\mathrm{W}$ に相当する。

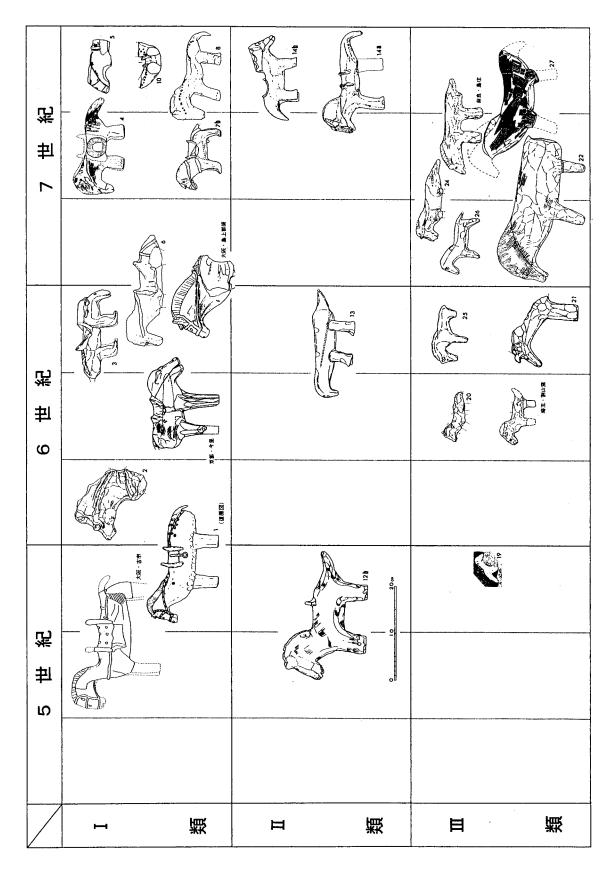
土馬の年代は、一括8世紀後葉(長岡京期)に押さえる。なお、尻尾は斜め上方に真っ直ぐに伸びるものと、全体に少し湾曲するものとがある。

## **Ⅲ類第5型式**(第11図)

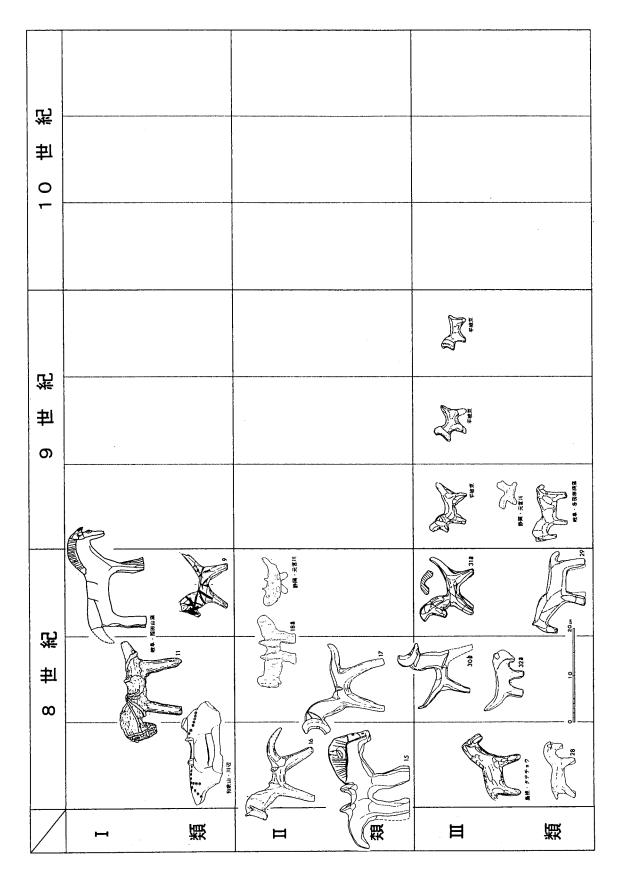
②. 恒武·西浦遺跡(北区SR30)出土〔柴田2000〕

平成9年、浜松環状線道路改良工事に伴って側静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した調査で、自 然流路(SR30)から出土したものである。

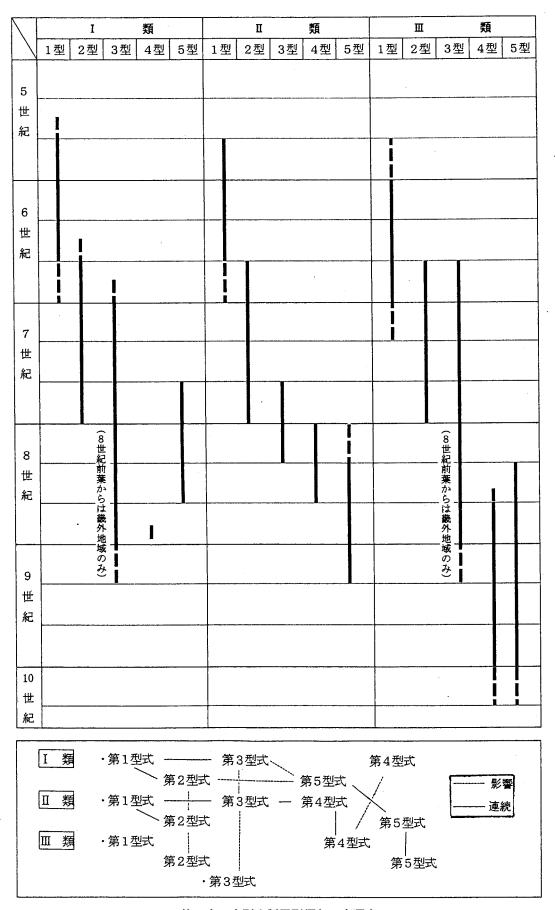
SR30 は幅約 11 mの河道で、この最下層から土師器・須恵器と共に 7 点(内 1 点は須恵質)が発見されている。土器類は、平城宮編年のⅢに相当する。須恵質の土馬の年代を、8世紀中葉に押さえておく。さらに、別地点の上層からも土馬(9世紀前葉か)がまとまって出土している。



第12図 小型土製馬形編年図(1)



第12図 小型土製馬形編年図(2)



第4表 小型土製馬形編年・変遷表

以上、Ⅲ類は第1型式が5世紀後葉から6世紀初頭に現れ(渡来系の集落で生まれる。装飾付須恵器の馬に近いもの)、7世紀前葉(鳥取県谷畑遺跡や同イガミ松遺跡、同クズマ遺跡は厳密に言えば鞍を持ち Ⅱ類になる)まで続く。次いで、第2型式が I 類・Ⅱ類の第2型式の影響で生まれ、6世紀後葉から 7世紀後葉まで存在する。第3型式は生き馬を模したものが6世紀後葉から8世紀末まで継続し、特に畿外では平安時代の初頭まで長期間続いている。

また、第4型式(都城型)はⅡ類の第4型式の直後(8世紀中葉)から、9世紀後葉ないし10世紀前葉まで継続する。一方、第5型式はⅡ類の第5型式と同じ地域で、この影響を受け、8世紀中葉から10世紀前葉に見られる。なお、最後は都城型(第4型式)と同形態を取り終焉となる。

## 5. おわりに

これまで、律令期の都城型と呼称されるものしか明確な変遷が辿れなかった土製馬形を、馬具類の 有無で三つに分類し、それぞれの類を五型式に分けて検討してみた。

その結果、古墳時代中期に登場した小型土製馬形には埴輪馬の影響で生まれた飾馬(I類)と鞍馬(I類)、生き馬を模した裸馬(I類)の二つの系統があることが明らかになった。さらに、裸馬には奈良井遺跡等扱いに苦慮した小型粗製の簡素な作りのもの(第1型式、渡来系の人々が製作か)と、これに直接繋がらない肉感溢れた写実的なもの(第3型式)があることも分かった。

次いで、当初目的の一つであった都城域(畿内)外での律令期の形態は、それぞれの地域で各類とも第3型式が継続することを明らかにできた。さらに、年代比定が大きく流動的でその帰属が混乱していた遠江地域の土馬類は、畿内周辺と東海地域の窯業遺跡において I 類第2型式と第3型式の影響を受けた古墳時代の様相を残す I 類第5型式が生まれたことを契機に、これが奈良時代中葉に入って神明原・元宮川遺跡等の祭祀遺跡に持ち込まれ、I 類・I 類の第5型式として盛行する状況が確認できたのである。そして、これには遠江地域の旱天の被害が大きかったことが原因と推測した。なお、編年試案(第12 図・第4表)は型式学的な操作に基づいており、遺構での出土状況と若干異なるところも認められる。

また、この副産物としてⅡ類・Ⅲ類の第5型式が遠江の木製馬形(伊場遺跡、神明原・元宮川遺跡出土品のうち尻尾を跳ね上げる型式)にも影響を与えていたことが明らかになった。全国的な共通性が見出せないとされた畿外出土の土製馬形も都城型は分布拡大しなかったが、律令制祭祀の中ではそれぞれの地域で基本的な統一が図られていたようだ。旧国単位程度の中で変遷を辿っていけるなら、さらに連続性が見えると確信する。木製馬形・石製馬形との関連もあり、各地の祭祀遺物研究者に期待したい。

本稿を成すに当たって、まず大場磐雄氏、亀井正道氏、金子裕之氏を始めとする学恩に感謝したい。 また、『天王壇古墳』並びに『割山遺跡』報告書のコピーをお送りいただいた福島県本宮町教育委員 会と(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団の方々、常日頃から文献資料の収集でお世話を掛けている前静岡 県教育委員会佐藤達雄氏、國學院大學図書館林利久氏に深謝する。

#### 【引用文献】五十音順

赤穂市教育委員会 1990 『東有年·沖田遺跡現地説明会資料』 赤穂市教育委員会

臼杵 勲 1997 「第Ⅵ章4B 出土土器から見た奈良時代の祭祀」『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所学報第56冊 奈良国立文化財研究所

梅原 末治 1914 「河内國發見の土馬」『考古學雜誌』第4巻第12号 考古學會

泉森 皎 1969 「第V章4 その他の遺物」『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊 奈良県教育委員会

泉森 皎 1975 「大和の土馬」『橿原考古学研究所論集』創立 35 周年記念 吉川弘文館

馬の博物館 1986 『特別展古代文化・馬形の謎』展示図録 根岸競馬記念公苑学芸部

太田 好冶 1999 『西畑屋遺跡 1999 発掘調査報告書』 浜松市博物館 (財浜松市文化協会

大場 磐雄 1930 「上代祭祀阯と其の遺物に就いて」『考古學雜誌』第20巻第8号 考古學會

大場 磐雄 1937 「上代馬形遺物に就いて」『考古學雜誌』第27巻第4号 考古學會

大場 磐雄 1943 『神道考古學論攷』 葦牙書房

大場 磐雄 1966 「上代馬形遺物再考」『國學院雜誌』第67巻第1号 國學院大學文学部

大橋 信弥 1981 「近江出土の土製馬について」『滋賀考古学論叢』第1集 滋賀考古学論叢刊行会

小笠原好彦 1974 「IV章 3 土製品」『平城宮発掘調査報告IV』平城京左京一条三坊 奈良国立文化財研究所学報第 23 冊

小笠原好彦 1975 「土馬考」『物質文化』25 物質文化研究会

小川 榮一 1914 「美濃國發見土馬に於て」『考古學雜誌』第4巻第8号 考古學會

小田富士雄 1971 「古代形代馬考」『史淵』105·106 合輯号 九州大学文学部

小田富士雄・真野和夫 1981 「土馬」『神道考古学講座』第3巻 雄山閣

柏原 正民 1996 「第5章2 遺物のまとめ」『田井野遺跡』兵庫県文化財調査報告第154冊 兵庫県教育委員会

鹿沼 栄輔 1990 「第4章5 祭祀について」『長根羽田倉遺跡』 ) 脚群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第99集

金子 裕之 1985 「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館

金子 裕之 1991 「律令期祭祀遺物集成」『律令制祭祀論考』 塙書房

岸本 雅敏 1984 「No 21 遺跡遺物」『小杉流通業務団地内遺跡群』第6次緊急発掘調査概要 富山県教育委員会

絹川 一徳 1998 「古墳時代の木製祭祀具」『大阪市文化財情報 葦火』75号 (助大阪市文化財協会)

木村 泰彦 1980 「4 (6) 今里遺跡出土の土馬について」『埋蔵文化財発掘調査概報』第2分冊 京都府教育委員会

木村 泰彦 1986 「乙訓出土の土馬集成」『長岡京古文化論叢』 中山修一先生古稀記念事業会

九州歷史資料館 1987 「Ⅱ章4 102次調査」『大宰府史跡』昭和61年度発掘調査概報 九州歴史資料館

京嶋 覚 1993 「第2章1 長原遺跡西地区の調査」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告V』 (財大阪市文化財協会

清野 謙次 1944 『日本人種論変遷史』 小山書店

國下多美樹 1984 「長岡京跡第8274次立会調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集 向日市教育委員会

黒板 勝美編 1984 『續日本紀』後篇 新訂増補国史大系普及版 吉川弘文館

黒崎 直 1974 「Ⅱ章 前川遺跡発掘調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』 奈良市

黒崎 直 1983 「古代の信仰」『季刊考古学』第2号 雄山閣

神戸市教育委員会 1997 『住吉宮町遺跡(第23次調査)現地説明会資料』 神戸市教育委員会

後藤 守一 1930 「石製品」『考古学講座』第32号 雄山閣

近藤 正 1972 「山陰」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣

斎宮歴史博物館 1989 「Ⅳ章特殊遺物概要」『斎宮跡発掘資料選』 斎宮歴史博物館

佐藤 隆 1994 「森の宮遺跡の土馬と人面土器」『大阪市文化財情報 葦火』48号 (動大阪市文化財協会

柴田 睦 2000 『恒武西宮·西浦遺跡』埋蔵文化財調査研究所調査報告第 120 集 (財静岡県埋蔵文化財調査研究所

新東 晃一 1987 「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」第30巻第2号 側古代學協會

積山 洋 1998 「飛鳥時代の難波京の一角」『大阪市文化財情報 葦火』76号 (助大阪市文化財協会

巽 淳一郎 1984 「Ⅲ1 B 祭祀用土器・土製品」『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』 奈良国立文化財研究所

巽 淳一郎 1996a「馬形代」『まじないの世界Ⅱ』日本の美術第361号 至文堂

巽 淳一郎 1996b「煮炊具の生産と供給」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東4 煮炊具-』古代の土器研究会

田中 久生 2003 「ⅢE・H・I・J区の調査結果」『高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)』 三重県埋蔵文化財センター

田辺 昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

土井 實 1955 「大和土製馬考」『古代學』第4卷第2号 古代學協會

中山平次郎 1914 「筑前國發見の土馬」『考古學雜誌』第4巻第12号 考古學會

西 弘海 1986 『土器様式の成立と展開』 真陽社

錦織 慶樹 1988 「Ⅳ章2土馬について」『薦沢A遺跡・薦沢B遺跡・別所遺跡発掘調査報告書』 松江市教育委員会

根鈴 輝雄 1997 「4. 奈良井遺跡」『特別展まつりの造形-古代形代の世界-』展示図録 倉吉博物館

野島 稔 1984 「河内の馬飼」『万葉集の考古学』 筑摩書房

橋本 高明 1985 『菱木下遺跡発掘調査概要·I』 大阪府教育委員会

原田 大六 1958 「第三章七 滑石製品」 『沖ノ島』 宗像神社復興期成会

広江 耕史 1981 「出雲の土馬」『えとのす』第16号 新日本教育図書

広江 耕史 1983 「Vオノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会

冨加見泰彦 1993 「第3章2 Ⅰ区Cの調査成果」『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』側大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 75 輯

別府 洋二 2007 「第7章2 土馬について」『福中城跡・芝崎遺跡』兵庫県文化財調査報告第318 冊兵庫県教育委員会

前田 豊邦 1968 「土製馬に関する試論」『古代学研究』第53号 古代學研究會

松浦武四郎 1882 『撥雲餘興』第二集

三重県教育委員会 1972 『古里遺跡発掘調査概報A地区·B地区』 三重県教育委員会

水野 正好 1983 「馬・馬・馬ーその語りの考古学」『文化財学報』第2集 奈良大学文化財学科

村上 吉郎 1982 「土馬祭祀と漢神信仰」『石川考古学研究会々誌』第25号 石川考古学研究会

森 浩一 1974 「考古学と馬」『日本古代文化の探求 馬』 社会思想社

森 隆 1985 「北桜南遺跡」『野洲町内遺跡群発掘調査概要』昭和59年度 野洲町教育委員会

野洲町教育委員会 1980 『和田遺跡現地説明会資料』 野洲町教育委員会

山口 均 2002 「8. 長岡京跡右京第 689 次 - 仮称古城遺跡」『長岡京跡ほか』向日市埋蔵文化財調査報告書第 54 集

山崎 義夫 1984 『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書第8集 本宮町教育委員会

大和 修 1981 「Ⅲ3 (4) 土馬」『割山遺跡』 深谷市割山遺跡調査会

山中 笑 1915 「繪馬と土馬の關係」『人類學雜誌』第30巻第2号 東京人類學會

山村 宏 1966 「陶質馬形土製品」『大沢·川尻古窯跡調査報告書』 遠江考古学会

米子市教育文化事業団 1998 「陰田隠れが谷遺跡」『萱原・奥陰田Ⅱ』 劇米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 24

渡辺 昇 1988 「第3章6 南台遺跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』 兵庫県文化財調査報告書第62 冊

渡辺 博人 1996 「第3章5 2号窯址灰原出土遺物」『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』 各務原市教育委員会